

信教の自由と個性

対バビロン

AT ジョーンズ著

導入

個性と自由の神は、信仰と真理における個性と自由に対する神の原理と権利を、神がこの何世紀にもわたって驚くべきことに常に努力して明らかにし、維持し、争われ、貶められたまま放置されることを許さないであろう。教会やキリスト教徒からは認識されているものの、あまり代表されていません。いいえ、この真理、この素晴らしい真理は、キリスト教会とキリスト教自体の存在そのものの根本的かつ最高の真理です。この神聖な真理は、世界と教会の前でその神聖な地位を克服し、永遠に確保するでしょう。

キリスト教の宗教と教会のこの根本的で神聖な真理を信奉する人々は、初めの頃と同じように、今も常に自分自身が世界の真のキリスト教会であり、キリストが与えたあの「栄光の教会」を構成するでしょう。ご自身が教会のために、「御言葉によって水の洗いによって聖別され、清められます」。その栄光の出現の際に、「シミやしわ、そのようなものは何もなく、神聖で汚れのない輝かしい教会をご自身に差し出すことができるでしょう」傷。」

宗教は「創造者に対する私たちの義務と、この義務を果たすための神による方法」です。

自由とは「他者の支配や制限された状況から自由な状態のことです。倫理と哲学において、理性的な主体が、理由や動機に従って自発的かつ自発的に選択を行い、自分の行動を決定する力。」

したがって、信教の自由は、人間が他者による支配や制限された状況から免除されることを意味します。人間が自発的かつ自発的に選択をし、自分の行動を決定する自由。創造主に対する義務と、その義務を果たす方法において。

神が人間を創造したので、物事の性質上、すべての関係の第一は神と関係するものです。そして、第一の義務は神に対する義務にほかなりません。

宇宙に知的生命体が1つだけしか存在しなかった時代があったとします。彼は育てられた。そして、あなたの創造主との関係、神に対するあなたの義務、それが唯一あり得るものなのです。これは、存在する可能性のあるすべての関係の最初のもので、したがって、次のように書かれています。「すべての戒めの第一は次のとおりです。イスラエルよ、聞け、私たちの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛さなければならぬ。」

あらゆる魂の側に存在するすべてのものは、すべてが神から来たものであるため、まず第一に神によるものです。したがって、これがまず第一に、

それは、それが話し言葉や書き言葉によって与えられた初めての戒めだからではなく、あり得るかもしれない最初の戒めだからです。そしてこれは、知的生き物の存在の第一原理の表現だからです。この原理は、最初の知的生物の存在に固有であり、その存在の最初の瞬間に存在しました。そしてそこには原則が永遠に、修正されず、分散せずに存在します。

さて、これは考えられるすべての関係の最初のものであり、すべての義務の最初のものですが、この関係と義務は知的な生き物の存在そのものに固有のものですが、この固有の義務においてさえ、神はすべての知的な生き物を自由に創造されました。

そのような義務を認識するか否かは自由であり、この義務を履行するか否かはあなたの好みに応じて自由です。

これに関して、「今日、誰に仕えるかを選びなさい」と書かれています。「望む者は命の水を自由に摂取することができる。」したがって、宗教において、創造主に対して私たちが果たさなければならない義務と、それをどのように遂行するかという点において、神は人間を完全に「他者の支配や制限的な状況から免除」して創造したというのは絶対に真実です。彼は「自発的かつ自発的に、自分で選択し、自分の行動を決める」自由を与えられた。したがって、信教の自由は神の賜物であり、合理的存在そのものの賜物に内在するものである。

神への奉仕は、それを提供する人が自由に選択しないものは、神からのものであるはずがありません。なぜなら、「神は愛である」からです。愛と強制、愛と強さ、愛と抑圧は決して共存することはできません。したがって、個人の自由な選択から生じないいかなる義務や義務も、神に提供されたり与えられたりするものは、神からのものでも神のためのものでもありません。この点で、主がご自分の被造物を創造されたとき、

天使か人間か——この生き物が神に仕えることで幸せになれるように、そして神に奉仕や礼拝を捧げることに美徳が生まれるように、神はそれを自由に選択できるように彼を創造しました。そしてそれが個性であり、それに対する神聖な権利です。

神は人間を自由に創造されました。人間が罪によってこの自由から切り離され、失ったとき、キリストは彼を完全に自由に戻すために来られました。したがって、神とキリストの道は自由の道です。そして、世界の歴史を通じて、キリストを通して人類とともに神が行った働きは、この道を明らかにし、唯一の真の自由である「魂の自由」という絶対的な安全を人間に与えることでした。御子が自由にされた者は、真に自由なのです。

聖書には、信教の自由、つまり人間の支配や世界権力者たちの結合に対する個人の魂の自由というテーマに関して、6つの具体的な教訓が明確かつ明確に与えられています。これらの各レッスンは、明確かつ具体的な原則の主題を扱います。6つのレッスンを組み合わせると、各原則の全範囲を完全にカバーできます。

私たちはここで、聖書に示されているように、特別な学習、つまりこれら6つのレッスンを別々に、連続して受講することを提案します。宗教の自由を求める戦いはまだ終わっていません。完全な信教の自由は復活しない聖書の中で完全に明らかにされているように、原理的にさえまだ知られておらず、ましてや実際には多くのキリスト教徒にさえ知られています。

ですから、真理の聖書に述べられているように、原理的にも経験的にも完全な信教の自由を得ることができるように、さあ、学び学びましょう。

第1章

宗教の自由

独裁主義に関連する

物事の性質上、他人が支配する法的余地はありません。

個人の人生もビジネスも。これは、特異かつ最高に神のみの領域であり、神はご自身の姿に似せ、ご自身の栄光のために人間を創造されました。各人は個別かつ個人的に責任を負います。彼だけに答えなければなりません。

しかし、罪深く反抗的な人間は、神が人間個人の魂の中や魂とともに神の地位を占めることを決して許しませんでした。彼は常に野心的であり、その地位を自分自身で主張する準備ができており、その主張を有効にするためにあらゆる可能な手段と手段を試みてきました。一般原則に関する限り、歴史そのものは、魂を支配するために神の代わりに自分を置くという、罪深く反逆的な人間のこの傲慢な主張を成功させるための、可能な限り最大規模での一連の試みにほかならないだろう。男性。人類の運命の形成に熱心に取り組んでいる神性が存在するということ、アベルの時代から現在に至るまで、微妙な事柄に対する個人の完全な自由の永続的かつ英雄的な主張と維持によって示されること以上に必要とされ、与えられるものはない。見せかけと、この世界が考え出すであろう力と力の強力な組み合わせ。ニムロデからネブカドネザルまで、そしてネブカドネザルから現在に至るまで、帝国の進路とエネルギーはこの一つの方向に向かって曲げられ、発揮されてきました。この間ずっと、アブラハム、ジョセフ、モーセ、ダニエルとその三人の仲間、ポール、ウィクリフ、ハス、ミリツツ、マティアス、コンラッド、ジェローム、ルーサー、ロジャー・ウィリアムズ、そして多くの記憶に残らない名前、そして何よりもイエスのような偉大な人々が来てくれました。キリストよ、神の信仰によって、人間に関する限り、人間の個性とその魂の自由、そして人間の範囲内およびその上でのみ神の主権によって、崇高に神とともに一人であり続けました。魂の領域。

バビロニア帝国は、当時の世界と同じように、文明世界を包含していました。ネブカドネザルは帝国の君主であり絶対的な統治者でした。「おお、王よ、王の中の王よ、天の神が王国と力と力と栄光を授けられたのです。人の子らはどこに住んでいてもその手に渡され、野の獣や空の鳥も、あなたがそれらすべてを治められるよう、その手に渡されたのです。」ダニエル 2:37,38。

神はご自身の摂理的目的により、すべての国々をバビロンのネブカドネザル王の支配下に置かれました。エレミヤ 27:1-13。バビロニアの統治形態と制度では、王の権威は絶対的でした。彼の言葉は法律でした。この主権絶対主義において、ネブカドネザル王は、肉体だけでなく魂も、宗教生活も宗教の主権者であると考えました。

彼の権力の影響下にあった人々の民事行為。そして彼は諸国民の支配者であったのですから、宗教においても諸国民の宗教においても支配者となるでしょう。

この点に関して、彼は高さ約100フィート、幅10フィートの大きな像をすべて金で作り、「バビロン州のドゥラの野原に設置」しました。それから彼は地方の帝国のすべての役人を呼び、この偉大な黄金の像を奉獻し、崇拝させました。警官全員がやって来て、一緒に像の前に立った。

「さて、使者は大声でこう宣言した。おお、民族、国家、そしてあらゆる言語の人々よ、あなたたちに命じられている。ラッパ、パイプ、ハーブ、豎琴、詩歌、バグパイプやあらゆる種類の音楽を聴きながら、ネブカドネザル王が立てた黄金の像をひれ伏して崇拝するでしょう。ひれ伏して彼女を崇拝しない者は、直ちに火の炉に投げ込まれます。」そして、楽器が崇拝の大合図を鳴らすと、「あらゆる言語のすべての国民と人々」が黄金の像を崇拝するためにひれ伏しました。ダニエル 3:4-6。

しかし集会には、エルサレムからバビロンに捕虜として連れて行かれたが、バビロン州の政務に関して王の役人によって任命されたヘブライ人の若者が三人いました。彼らはひれ伏したり崇拝したりしませんでしたし、特別な注意を払いませんでした。

何が起こっていたのか。

これは観察され、王の前で非難を引き起こした。「あなたがバビロン州の政務に任命したユダヤ人が何人かいます。シャデラク、メシャク、アベドネゴです。「王よ、この人たちはあなたを無視しました。彼らはあなたの神に仕えませんし、あなたの立てられた黄金の像を崇拝しません。」ダニエル 3:12。

そこで「激怒した」王は、三人の若者を自分の前に連れてくるよう命じました。これは完了しました。今度は王自らが彼らに直接、個人的にこう語りました。「シャデラク、メシャク、アベドネゴよ、あなた方は私の神々に仕えたり、私の立てた黄金の像を崇拝したりしないというのは本当ですか？」その後、王自身が、あらゆる種類の音楽の楽器の音を聞くと、彼らはひれ伏して礼拝しなければならない、そうでなければ「すぐに燃え盛る火の炉に投げ込まれる」という命令を繰り返しました。

しかし若者たちは冷静にこう答えました。「ネブカドネザルよ、これについては答える必要はありません。私たちが仕えている私たちの神が私たちが救い出したいのであれば、王よ、燃え盛る炉とあなたの手から私たちが救い出してください。そうでなければ、王よ、私たちはあなたの神々に仕えたり、あなたの立てられた黄金の像を崇拝したりしないことを知ってください。」ダニエル 3:16-18。

この問題は今や明確に確定した。世界最大の権力の君主は、自らの命令を直接この3人に個人的に表明した。そして彼は彼らから、彼らが提出しないという明白な回答を受け取っていました。

それは行為であり、権力絶対主義の国王がこれまで出会ったことのないような言葉だった。したがって、彼の中には公式の怒りだけでなく個人的な怒りも呼び起こされました。そして彼は若者たちに対して「顔つきが変わった」ほど激怒し、炉を通常の7倍熱くするよう命じた。そして、「彼の軍隊にいた最も有力な者たち」が若者たちを縛り上げ、燃え盛る炉の真ん中に投げ込んだという。

それで、それは完了しました。そして、三人の男は、「マント、チュニック、帽子、その他の衣服で縛られていました。。彼らは燃え盛る炉の中に縛り付けられて倒れた。」しかしその時、王は人生でこれまでにないほど怖くなり、「すぐに立ち上がって顧問たちに叫びました。「我々は縛られた三人を火の中に投げ込んだではありませんか？」

彼らは彼にこれが真実であると保証した。しかし彼はこう続けた。そして部屋の様子はまるで神の子のようです。」

それから王は炉の入り口に近づき、男たちを名前呼び、「いと高き神の僕たちよ、出てきてください！」と言った。それから彼らは「火の中から出てきました。太守、知事、総督、王の顧問らが集まり、火がこれらの人たちの遺体を覆う力がないことを確認した。彼らの頭髪は焼けず、外套も着替えず、火の匂いも立ちこまなかった。」

「ネブカドネザルは話し、こう言った。「シャデラク、メシャク、アベデネゴの神に祝福あれ。神は天使を遣わし、王の言葉を果たそうとはせず、引き渡すことを望んでいたの、彼を信頼していた家臣たちを救い出した。」自分たちの体を使い、自分たちの神以外の神に仕え、崇拝するのです。」

状況は次のとおりです。主はすべての国々をバビロンの王に服従させました。ご自身の預言者のメッセージによって、彼は自分の民、ユダヤ人、そしてその中の三人の若者に「バビロンの王」に仕えるよう命じました。しかし、三人は、バビロン王自身が個人的に、直接命じた詳細については、バビロン王に仕えることを明確に拒否した。そして、この拒否の中で、主ご自身が非常に重要なことに彼らの側に留まり、彼らを救っていただきました。

したがって、主が民にバビロンの王に服従してご自分に仕えるように命じられたとき、宗教の分野で主に仕えるよう民に服従するよう命じたり意図したことは一度もなかったということをご自身に証明することは不可能でしょう。

この三人の態度に対する疑いの余地のない承認と彼らの見事な釈放によって、主はこの問題における彼の命令が間違っていたことを王に完全に明らかにされました。この王が要求する権利のない崇拝を要求したこと。主は彼を諸国民の王としたとき、民の宗教において彼を王としたのではなかった。神は彼を国家、民族、言語の指導者に導くことによって、たとえ一人の個人の宗教の指導者になることも彼に与えなかったということ。主は政治的、物理的な奉仕に関して、すべての国々と民族を王のくびきの下に置かれたにもかかわらず、その同じ主が、国に対する奉仕に関してはいかなる形においても王に権力や管轄権を与えていないことを王に疑いの余地なく証明されたということ。彼らの魂。国家と国家の間、人間と人間の間、すべてのことにおいて、すべての民族、国家、言語が神に仕えるために神に与えられたにもかかわらず、神は神をそれらすべての支配者としたにもかかわらず、しかし、王は各人間と神の関係とは何の関係もありませんでした。そして、個人の権利の前では、良心と崇拝において、「国王の言葉」は変更されなければならず、国王の布告は無効である。まさにこのことにおいて、世界の王は何者でもない、なぜならここでは神だけが主権者であり、すべてを支配しているからである。

そして、すべての王とすべての人々の永遠の指示のために、これらすべてはその日に行われ、それは時代の終わりが来た私たちの戒めのために書かれました。

第2章

宗教の自由
法の優位性を考慮して

世界強国とバビロン帝国は永遠に去りました。そして別のものがそれにとって代わりました、メディア・ペルシャの権力と帝国です。ここに政府のもう一つの原則があり、世界は信教の自由について新たな教訓を得ることができました。

メディア・ペルシャ帝国では、統治の原則がバビロンの原則とは異なっていました。

これまで見てきたように、バビロンは絶対君主制であるだけでなく、独裁制、つまり一人統治、一個人絶対主義でもありました。王の言葉は法律であり、王の意志と言葉が変わると法律も変更可能でした。王は法の源であり、王の言葉は他のすべての人にとっての法でした。しかし彼自身に関しては法の制限はありませんでした。

メディア・ペルシャ政府も絶対王政でした。そこでも王の言葉が法律でした。しかし、バビロンに関しては根本的な違いがあります—
国王の言葉が法律として発布されると、国王自身がその法律を変更したり矛盾したりすることはできません。王自身も、かつて法律となった自分の言葉や布告によって、自分自身に対して畏にはめられていました。したがって、メディア・ペルシャ政府は法の政府であり、その原則は法の至上であった。

この帝国の経営管理責任者として3人の大統領があり、そのうちのダニエルが初代でした。ダニエルの知識、誠実さ、技術、そして行政における一般的な価値観のおかげで、王は「彼を王国全体に据える」ことを念頭に置いていました。このことが知られるようになると、他の2人の大統領と王子たちの嫉妬を引き起こした。そして彼らは共謀して-

それを以下に示します。

まず彼らは、帝国政務におけるダニエルの行為に関して「ダニエルを告発する機会」を求めた。しかし、長く熱心な捜索と最も詳細な精査の結果、彼らは活動を中止せざるを得なくなり、「いかなる非難も見つからない」と告白した。。。「間違っても罪もない」、なぜなら「彼は忠実だった」からだ。

「すると、この人たちは言った、『神の律法に基づいてダニエルを告発しない限り、このダニエルを告発する機会は決して見つからないだろう』。」
しかし、彼らは、自分たちの神の律法に関してさえ、彼に不利な機会を見つけることができなかった。彼ら自身が、最初に望ましい機会を必然にする状況を作り出したのだ。

帝国の政務において何らかの機会や過失を見つけようとする彼の長くたゆまぬ努力により、彼らは彼の神への絶対的な献身と忠誠を確信した。彼らは調査を通じて、彼が神への絶対的な献身という狭い境界線から間髪を留めず傾くことは決してあり得ないことを経験的に発見した。しかし、これは完全に個人的な問題であり、いかなる人間も介入するものではありませんでした。そして、他人や他人に対するあなたの行動において、

国は、自らの意識的に偏った調査によって、それが実際に有益であることを実証した。

したがって、たとえ状況や条件によっては、神の律法に関してさえ、彼に不利な理由を見つけることはできません。したがって、彼らはそのような状況を作り出す必要性に直面し、ダニエルの神への揺るぎない献身が彼らが前進するための手段を生み出しました。そこで彼らは帝国の役人全員を引き付ける計画を立て、王のところへ行ってこう言いました。王国のすべての大統領、知事と太守、参事官と総督は、国王が法令を制定し、30日間、いかなる神に対してもいかなる人間に対しても請願することを断固として禁止すべきであることに同意した。おお、王よ、あなたはライオンの穴に投げ込まれないでください。それゆえ、王よ、今、禁止令を認可し、以下の場合には変更されないように証書に署名してください。

メディア人とペルシア人の法律に従っており、これを取り消すことはできない。」ダニエル 6:6-8。

国王は、帝国の多数の高官からのこのお世辞の提案に誘惑されるままに、法令に署名した。ダニエルは、その法令がでっち上げられたものであり、その法律に王が署名したものであることを知っていました。彼は、それが今や帝国の法律であり、回避することも変更することもできない法律であることを知っていました。しかし、彼は家に帰り、定期的な祈りの時間が近づくと、1日に3回、「神の前で祈り、感謝をささげた」のです。それから、帝国法に対するこのあからさまな無視を考慮して、彼らは国王のもとに急いで行き、非常に敬意を持って彼にこう尋ねました。。」

王は「メディア人とペルシア人の法律によれば、この言葉は確実であり、取り消すことはできない」と答えた。そこでこの策略の作者たちは、「このダニエルはユダの流刑者の一人ですが、王よ、あなたにも、あなたが署名した禁止命令にも注意を払っていません。しかし、彼は一日に三回祈っています」と報告しました。

それから、これを聞いた王は「非常に悲しみ、心の中でダニエルを解放しようと決心しました。そして日が沈むまで彼は彼を救おうとした。」しかし、その間ずっと、そしてあらゆる機会に、王は狡猾な人々から次の訴えに直面しました。法律"。「王よ、知っておいてください、王が認可した禁止令や法令は変更できないというのがメディア人とペルシアの法律です。」

法の優位性は国王自身を制限した。逃げ場はなかった。そして、非常に気が進まない中、「彼はダニエルを連れてきて、ルの洞窟に投げ込むように彼らに命じました。

イオン。」

王は一夜を断食し、眠れずに過ごしました。しかし朝早く、彼は急いでライオンの巣に行き、「悲しそうな声でダニエルに呼びかけました。王はダニエルに言いました。「ダニエル、生ける神の僕よ、もしかして、あなたが絶えず仕えているあなたの神が、あなたをライオンから救ってくれたのでしょうか？」

ダニエルは「王よ、永遠に生きてください！」と答えました。私の神は天使を送ってライオンの口を閉じ、彼らが私に危害を加えないようにしました。私もあなたに対して何の罪も犯していません、王よ。」そしてそこでは、神の崇拝に影響を与える法律を軽視する者は神の前では無罪であり、国王に対しても、国家に対しても、社会に対しても、あるいは社会に対しても「いかなる罪」も犯していないことが、完全かつ永遠に証明された。他の人、法律または政府の原則。

神の真理におけるこれらすべては、地上のいかなる政府も宗教の問題、つまり「私たちが創造主に対して負う義務、そして神のやり方に従って」いかなる権利や管轄権も持ち得ないことを再び証明しています。

自分のことは大事にしましょう。」この場合、いかなる政府も宗教を尊重する規定を法律に組み込む権利を決して持ち得ないこと、つまり「法」の優位性と完全性を主張することができるというさらなる実証がある。「それは基本的に宗教の問題ではなく、法律だけの問題である」、「私たちは宗教の遵守を求めているのではなく、法律の尊重を求めているだけである」。ダニエルと「メディアとペルシャの法の優位性」の場合、これらすべての訴えに対する神の答えは、宗教に関係するものは決して法律の中に正当な地位を占めることはできない、というものでした。

宗教における個性を完全にする権利は、本質的に神聖なものであり、したがって絶対に譲ることのできない権利です。そして、宗教上の遵守や禁止を法律事項としても、この神聖な権利の自由な行使には影響しません。たとえ宗教が法の一部となったとしても、権利の広範さとその行使の完全な自由は常に変わりません。そして、宗教、宗教的遵守または禁止が法律で定められている場合、法律はメディアやペルシャの法律のように最高で柔軟性がありませんが、宗教における神の権利と個人の完全な自由は、その宗教を具体化する法律にも適用されます。そのような法律はまったく法律ではありません。「法の至上性と整合性」を隠れ蓑として宗教上の遵守や禁止を課すというごまかしは、宗教における神の権利と完全な自由と個性を排除したり何らかの方法で制限したりするのではなく、実際にすべての請求根拠を排除する程度に反応するだけである。「法の優越性と完全性」に関しては、事実上、この事件における特定の法律を無効にしている。

確かに民事の分野では民法が最高ですが、宗教の分野ではまったくその地位を占めません。

ネブカドネザル王の例に見られるように、宗教における個人の神聖な権利が専制政治に関係している場合、王の言葉は変わらなければなりません。

メディアやペルシャの政府に例証されているように、法の優越性と柔軟性のなさに関する宗教における個人の神聖な権利の存在下では、宗教に影響を与えたり宗教を考慮したりするいかなる法も、まったく法ではありません。

宗教の分野は神の分野です。この分野では神のみが主権者であり、神の意志が唯一の法則です。そしてこの分野では、個人は神に対して単独で立ち、神に対してのみ責任を負います。

第3章

何があっても信教の自由
国家と教会の結合に関するもの

ネブカドネザル王と三人の若いヘブライ人の場合、非常に驚くべき事実と疑いの余地のない経験によって、神聖な真実と原則が永久に明らかになった。それは、人民の宗教に関してはいかなる君主も権利を持ち得ないということである。宗教における個人の権利を考慮すると、国王の言葉は変わらなければならないということだ。

ダニエルに対するメディア・ペルシア政府の場合、対応する事実と経験によって、神の意志と真実、そして人民の宗教には法も政府も存在しないという原則が永久に明らかになった。

宗教における個人の自由な行使の前では、宗教に関するいかなる法律も無意味である。そして、そのような法律を完全に無視し、無視するすべての個人は神の前では「無実」であり、政府、法律、社会の前でも「犯罪」はありません。

これら 2 つの例と、それらが示す原則は、地上の政府のあらゆる段階をそのまま網羅しています。このようにして、宗教は、その儀式、制度、行事とともに、いかなる段階や形態であっても、地上の政府による強制から完全に免除されており、またそうあるべきであるという、偉大かつ重大な真実が明らかになります。宗教は、それに関係するすべてのものを含めて、神との個人的な関係においてのみ個人に属します。

しかし、人間が宗教の領域で人間を支配しようとした別の方法があります。それは、教会を通じて、国家を通じてです。

世から神のもとに召され、世から切り離された人々が、世における神の教会です。神がご自分の民をエジプトから呼び出されたとき、彼らは最初は「荒野の教会」でした。そして後にカナンの地で彼らはその教会になりました。

彼らは肩が凝り、心がかたくなで、思考が盲目であるため、悲しいことに、神の教会としての神の偉大な目的を見失っています。しかし、神はその善意と憐れみによって、「荒野における彼らの行為に耐え」、また地上でも世代から世代へと続きました。このようにして、多くの変遷を経ながら、主であるキリストが地上に来られる時まで、人々は教会として存続しました。これまでずっと、この教会は広大な王国と統治権の最も輝かしい約束を継承してきました。

キリストが人間として地球に来たとき、ローマの支配と権力により、その教会の人々は厳しく残酷な一時的な服従を続け、彼らは約束された救出者の出現を待ち望んでいました。この救出者は十分に約束されており、ついに彼はやって来ました。しかし、教会の偉い人たちは、世俗的な野心のために、約束された王国と支配の霊性から目を隠すことを許していました。ローマのくびきを解き、その権力を打ち破り、選ばれた人々の教会を、これまで維持されてきたものに相応しい、諸国民に対する権力と支配の地位に高める政治的・世俗的な解放者を待つよう人々を求め、教えた。あなたの国よりも長い間、国々によって。

イエスが初めて公の宣教に現れたとき、これらの教会の偉人たちはイエスの周りに集まった群衆に従い、イエスが彼らの期待に応えてくださることを願いながら、イエスの話に興味深く耳を傾けました。しかし、群衆の関心と熱意が「イエスを王にさせようと思う」ほどになったのを見て、イエスが名誉を受け取ったり、そのような計画を奨励したりする代わりに、「群衆の中から身を引いた」のを見たとき、彼らは、このことから、彼らは、ローマの支配からの解放と諸国民に対する高揚という野心的な希望はすべて、イエスに関する限り全く無駄であることも理解した。

この時までには、人々に対するイエスの影響力は非常に広く強力になっていたため、教会の指導者たちは、人々に対する自分たちの力が急速に消えつつあることに気づきました。彼らは、世俗的な権力と支配に対する野心的な計画や希望が実現したり認可されるのを見る代わりに、民衆の間で享受していた権力と影響力が大きく損なわれているのを見て失望した。そしてこれは、非常に無名で生まれ、評判の低い都市の出身で、せいぜいただの地位にあった男のせいです。

普通の教会員ですよ。彼らの地位と尊厳を守るために、早急に何かをする必要がありました。彼に説教したり教えたりしないよう命令することを考えるには明らかに遅すぎた。その時までには彼らは、彼だけでなく群衆自身もこの種の禁止事項に注意を払わないことをよく知っていました。しかし、彼の地位と尊厳を維持し、彼と国民に対する彼らの権力を確保するための方法があった。自分自身と自分の立場についての彼らの意見において、自分の立場と尊厳を、その立場だけでなく、教会の存在そのもの、さらには国家そのものと同一にすることは、非常に簡単なことでした。この点に関して、彼らは次のように結論づけています。そうすれば、ローマ人がやって来て、私たちの代わりだけでなく、国家そのものを奪うでしょう。」そして「その日から、彼らは彼を殺すことに決めた。」ヨハネ 11:47,53。

しかし、彼らはローマの権威に服従していたので、人を死刑にすることは合法ではありませんでした。したがって、目的を達成するには、政府または行政機関からの制御を獲得する必要がありました。そのような権威がローマのものであることは問題ではなかったし、ローマの権威も問題ではなかった。ローマの権威は彼らがこの世の何よりも嫌っていて、いかなる状況下でもそれを認めることができなかつたのである。教会における彼らの地位、尊厳、権力が失われるという恐ろしい選択肢を前に、これらすべては忘れられるべきです。

教会では、パリサイ派とヘロデ派が対極に立っていました。ヘロデ派はヘロデの支持者だったためそう呼ばれました。彼らはユダヤの王としてのヘロデの立場における弁明者でした。しかし、ヘロデはローマからの直接の指名によってのみ王であり、ローマの力によって王としての地位を維持し維持しました。したがって、ヘロデの支持者であり弁明者であるということは、さらにローマの支持者であり弁明者であることを意味していました。

パリサイ人は教会の中で唯一正しい人々でした。彼らは教会の極端な政党を代表していました。そのため、彼らは教会の純粋さを守り、神への真の忠誠と選ばれた人々の古代の尊厳の代表者でした。そのため、彼らは最も過激な反体制派であり、ローマ、およびローマ由来のもの、またはローマと関係のあるすべてのものに反対しました。

しかし、パリサイ人は、唯一の義人であり最高の威厳を持った人々であり、キリストに対して最も大きな敵意を抱いていた人々であり、会議やキリストを滅ぼす計画において主導権を握った人々でした。そして、彼を死刑にするという目的を達成するためには、ローマだけである世俗権力の協力が必要でした。したがって、イエスに対する目的を達成するために、彼らはローマに対する憎しみを無視し、職業上最も極端な敵対者であったローマの力そのものをイエスに対して利用するでしょう。

彼らが世俗権力を確保するためにローマへのこの溝を乗り越える手段は、ヘロデ派との共通のテーマを見つけることでした。ヘロデ派はパリサイ派ほどイエスに反対しなかったが、同盟を結ぶ用意ができていた。この同盟を通じて、政党はパリサイ派と一致し、その政党の政治的影響力と権力は教会指導者の指揮下に置かれることになる。これは彼らに軍事力の行使を保証することになり、彼らはイエスに対する宣言した動きを保証するために軍事力を行使する必要がある。

同盟が確立され、陰謀が形成されました。

命を奪うことになるだろう。」マルコ 3:6。「それから、パリサイ人たちは立ち去り、どのようにしてイエスを驚かせることができるかについて話し合いました。そして彼らは、ヘロデ派の人々とともに弟子たちをイエスのところに遣わした。「イエスを総督の管轄権と権威に引き渡すために、義人のふりをしてイエスを捕まえられるかどうかを確認する使者たち」である。マタイ 22:15,16;ルカ 20:20。そしてその総督はローマのピラトでした。

ついにその時が来たとき、ゲツセマナの恐ろしい真夜中に、ユダは「祭司長や民の長老たちから剣を持った暴徒」を連れていたとき、ユダは彼らに引き渡されて逮捕されました。

イエスを自分たちの支配下に置いたので、彼らはまずイエスをアンナスのところに連れて行きました。アンナスはイエスをカヤパに送り、カヤパはイエスをローマ総督ピラトに送りました。ピラトはイエスをヘロデのもとに送りましたが、ヘロデは「護衛とともに」イエスを無に帰し嘲笑し、まばゆいばかりの衣を着せられたイエスを差し出し、再びピラトのもとに送りました。そしてピラトがイエスを釈放したいと思ったとき、彼らはローマに対するピラト自身の忠誠を超えて、カエサルとローマに対する忠誠という究極の政治的文書を発行した。「東を解放したら、あなたはカエサルの友人ではなくなります。自分を王にする者は皆、シーザーに敵対するのだ。」

ピラトは、「あなたの王を十字架につけてやろうか？」と最後の訴えをしました。それに対して、彼は神を最終的に放棄し、ローマとより完全に一致するという表現的な言葉を得ることができました。「我々にはカエサル以外に王はいない」

「彼を十字架につける！彼を十字架につける！」「彼らは大声で叫びながら彼を十字架につけるよう促しました。そして彼らの叫びが勝った。」

こうして、宇宙の歴史の中で最も重大な犯罪が犯されました。そしてこれは、国家と教会の結合、つまり教会が世俗権力を掌握し、その邪悪な意志と目的を実現するためにその権力を利用することによって可能になったのです。

この恐ろしい事実だけでも、永遠の無限の破滅を保証し、同様のすべてのつながりを永遠に永遠の悪名に投げ込むのに十分です。与えられた最初の機会でそのような記録があったのであれば、国家と教会の結合、つまり世俗権力を支配する教会ということ自体が、どこであれ、人々と国家にとって最大の呪いであることが証明されたはずであり、決して証明されてはならないことは、まったく不思議ではありません。 . いつでも見つけられますように。

したがって、「世俗権力は教会への悪魔の贈り物であることが証明された。」

第4章

何があっても信教の自由 教会自体について

私たちは、君主制政府には宗教的遵守を強制する権利がないことを見してきました。そしてそのような権力がそうするときは、宗教における個人の権利が最高であり、君主の言葉は変更されなければならない。

また、法律が至上であるいかなる政府も、王国の法律に宗教に関する法令、政令、条項を追加する権利を有していないことも判明しました。そして、そのようなことが行われるとき、宗教における個人の権利は最高の権利であり、神の前では無罪であり続けます。

政府、法律、社会の前で、そのような法律を無視する人々は、その罪から完全に免除されます。

私たちは、教会にはその意志の実行や目的の推進のために市民権力を統制する権利がないことを発見しました。そして彼がそうするとき、最大の不法行為のつながりが形成されるということ。そのような教会には悪魔の権力が掌握されており、宗教における個人の権利は依然として最高であり、自由に行使されるべきである。

宗教における人間の支配が模索されるもう一つの組み合わせがあります。それは教会そのもの、つまり教会員と教会の関係についてです。そしてこれについては、原則にせよ、あるいは驚くべき経験の事実にせよ、聖書はこの主題に関して提供されている他の例と同様に明確に述べています。

イスラエルがエジプトから解放されたとき、どのようにして最初の「砂漠の教会」となり、後にカナンの地に教会が置かれたかについてはすでに報告されている。そして、地上におけるキリストの時代のこの同じイスラエルは、霊的にも実質的にも彼らにとっての神の理想には遠く及ばなかったにもかかわらず、それでも実際には直系の教会であったということです。

この教会の正式な組織も直系のままでした。祭司職、つまり祭司長と大祭司の順序と継承は、主が荒野でモーセを通して確立した秩序の直接の継承でした。教会の公式評議会であるサンヘドリンもまた、荒野でモーセを通して主によって任命された70人の長老の思想と形式に由来しています。したがって、地上におけるキリストの時代、イスラエルの組織全体、つまり祭司職と大会議は形を成しており、実際、荒野でモーセを通して主によって設立された神の組織から直接受け継がれていました。そしてそれはまさに荒野の教会から派生した教会でした。

主の使徒たちとイエスの最初の弟子たちは例外なく全員この教会の会員でした。彼らは他の人々と平等にその教会の礼拝と礼拝に参加しました。彼らは残りの者たちとともに、定時に礼拝するために神殿に往復した。そしてお寺で教えられました。使徒 2:46。 3:1; 5:12。そして民はそのとおりになったことを喜び、神の承認が大いに彼ら全員にかかったのである。

しかし、それらの使徒や弟子たちは何かを学び、教会の優れた人々が知らなかった、そして認識しようとしないうちに神の真理を知っていました。そしてそれを知っていて、彼らはそれを宣言するでしょう。したがって、彼らはイエスと復活、そしてイエスによる救い、そして他に方法はない、教会の正式な命令と組織が「今や裏切り者であり殺人者となった」あの同じイエスを説教したのです。したがって、教会のこの正式な命令と組織は、教会の個々の会員が真理であると知っているその真理を説教したり教えたりしてはならないと決定する職権と特権を引き受けました。

この意味で、神殿の祭司と当局はペテロとヨハネが祈りの時に神殿に行き、中風の男がイエスの名への信仰によって癒されたときに逮捕し、投獄したことになる。ペテロはそこに集まった人々に感心しながら説教していました。そして翌朝、教会の秩序と公式組織全体、支配者、70人の長老、律法学者、祭司、大祭司が集まり、ペテロと大祭司を呼びました。

ヨハネは彼らを彼らの真ん中に置き、彼らがどのような権威によって宣教していたのか、「誰の力によって、あるいは誰の名においてこのようなことをしたのですか？」と尋ねました。

するとペテロは「聖霊に満たされて」答えました。集会の全員が、その権威ある権威ある団体の前で、この二人の文盲の教会員の大胆さに「驚いた」。「彼らは自分たちがイエスと一緒にいたことを認識しました。」ペドロ氏とジョアン氏は評議会のメンバーが「相互協議」している間に評議会から解雇された。

彼らは会議で、「もう誰にもこの名前を言わないよう脅そう」と決めた。それから彼らはペテロとヨハネを呼び、「イエスの名において話したり教えたりしないよう、絶対に命じた」。しかしペテロとヨハネはすぐにこう答えました。なぜなら、私たちは自分たちが見たり聞いたりしたことについて語らずにはいられないからです。」いとも簡単に与えられたこの答えに、その集会では、これらの平凡で文盲な人々は次のように考えたように思えた。

教会員の一部は、自分たちのような個人が神から教えられ、神から直接学ぶことが可能であるという印象を実際に伝えているが、そのことについては教会の高官や高学歴の人々の集まり全体が気づいていなかった。 ;そして、彼らは評議会の命令には何の注意も払わず、評議会が何を言おうと何をしようと同様に関係なく続行するつもりだった。そして明らかに、評議会の見解では、そのような行動方針は、各人が自分自身で答えを出し、「すべての秩序と権威を破壊する」個人の独立を意味するだけである。

そのような人々から、役員に対して、そしてそのような威厳のある企業に対して、何という反応でしょう。あの8月の集会に対する庶民の反応は何ということだろう。個々の教会員から、何十年にもわたって教会組織に神から割り当てられた最も高貴な役員や命令を務めてきた人々の定期集会まで。これらの当局者らにとって、それは単なる思い込みであり、教会内のすべての秩序と組織の破壊であるとみなすことはできませんでした。

しかし評議会は、彼らが次のような激しい脅迫を受けてもなお存続することを許可した。もうそのように教えるべきではありません。

立ち去ることを許されたペテロとヨハネは、付き添いに行き、「祭司長や長老たちがどれほど多くのことを言ったかを彼らに話しました」。そして、他の人たちは、ほんの少しの敬意や恐れを示す代わりに、ペテロとヨハネのしたことをはっきりと認めただけでなく、彼らが「満場一致で」神に感謝し賛美し、彼らからの脅迫に目を向けるよう神に求めたことに非常に満足していました。彼らに「あなたの言葉を大胆に」宣言することを許可しました。そして神は彼らのキリスト教徒としての堅固さを目撃され、「彼らが集まっていた場所は震えた。彼らはみな聖霊に満たされ、神の言葉を大胆に宣言しました。」 「そして、信者の数は男性も女性もますます増え、主に団結した。」

教会の「権威」に対するこのあからさまな不服従、この大胆な「確立された秩序と組織の無視」を続けることは許されません。したがって、使徒たちは逮捕され、投獄されました。「しかし、大祭司と彼と一緒にいたすべての人々、つまりサドカイ派が蜂起すると、彼らは嫉妬し、使徒たちを捕らえて公開刑務所に入れました。」

しかし、見よ、「夜、主の御使いが牢獄の戸を開け、彼らを外に導き、彼らに言った、「行って、神殿に出て、この命の言葉をすべて民に告げなさい。」彼らはこれを聞いて、夜が明けるとすぐに神殿に入って教えました。」

その同じ朝、大祭司と彼と一緒にいた人々は「サンヘドリンとイスラエルの子らの元老院全体を召集し、彼らを牢獄から連れ出すよう呼び掛け」、使徒たちを彼らの前に引き出してすべてのことについて答えられるようにした。それは教会における「不服従」、「背教」、そして「組織労働への反対」である。使者たちが戻ってきて、刑務所はしっかりと閉まっており、見張りが持ち場にいるのを発見したが、囚人は誰もいなかったと報告した。しかし、サンヘドリンのメンバーたちがその意味に驚嘆していると、誰かがやって来て、彼らは「神殿で人々を教えている」と言いました。

彼らを再び逮捕するために警官が派遣され、サンヘドリンの前に連行された。大祭司は彼らに尋ねました、「私たちはあなたたちにその名で教えないようはっきりと命じたのに、あなたたちはエルサレムを自分たちの教義で満たしています。」

使徒たちはこれまでと同じように答えました。「私たちは人間ではなく神に従わなければなりません。私たちの先祖の神はイエスをよみがえらせましたが、あなたはイエスを木に吊るして殺しました。しかし、神はイスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、右手でイエスを王子、救い主に高めました。さて、私たちはこれらの事実の証人であり、神が神を与えた人々に与えられた聖霊も同様です。

従う。"

この禁じられた態度の大胆な固執に直面して、サンヘドリンのメンバーは「彼らを殺したいと思った」。しかし、この評議会のメンバーはガマリエルによってそのような極端な行動を思いとどまった。しかし、使徒たちは再び呼び出され、「むち打ち」され、再び「イエスの名において話すな」と命じられ、その後釈放されました。

使徒たちは評議会の前から立ち去った。しかし、彼らは評議会や自分たちがしたことによって怯えたり鎮圧されたりする代わりに、自分たちが見聞きしたことや知っていることを教えたために公式の教会組織から鞭打ちやその他の苦痛を受けるに値するとみなされたことを再び喜んだ。真実、真実。そして、サンヘドリンの会員が公式の教会組織の構成員であるにもかかわらず、彼らは彼らをこのように扱い、彼らが説教し教えてきたことを一切説教しないよう繰り返し命令したにもかかわらず、「毎日、神殿で、また家から」彼らは「家に帰って」も「教え、イエス、キリストを宣べ伝える」ことをやめませんでした。

このように、神のもとでの驚くべき経験という明確な事実によって、何よりも、あらゆる教会の司祭職、評議会、あるいは行政の権威、宗教、信仰、教えにおける個人の権利が依然として最高であることが証明される。この疑いの余地のない聖書の記述によって、教会の集会や評議会には、何を教え、説教すべきかについて、誰に対しても、あるいは教会員そのものに対しても、命令したり質問したりする権限や権利はないことが証明されています。(1)

(1)行為に関しては、会員の「違反」または「過失」の問題において、どのように進めるべきかを正確に教会に神の指示と指示が与えられます。そしてこの言葉は文字においても精神においても、そして態度においても忠実に従わなければなりません。

個人を「勝ち取り」「回復」させ、決して裁いたり、非難したり、見捨てたりしない柔和の精神。しかし、信仰に関する限り、教会には神の教えはなく、したがって手続きの権利もありません。「私たちがあなたの信仰を支配しているわけではありません」。「あなたには信仰がありますか？それを神の前で自分のものにしなさい。「信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を向ける」。

この事件に触発された記録は次のことを示しています。

1. ネブカドネザルと三人のヘブライ人の場合と同様に、いかなる君主も宗教に関するものに関して命令を下す権利を決して持つことはできないことが神から示されています。

2. メディア・ペルシャの法律と政府の場合と同様に、いかなる政府も宗教に関する法律を制定する権利を決して持ち得ないことが神によって証明されています。

3. キリストに対するイスラエル教会の場合と同様に、いかなる教会の役職も決して役に立たないことが神によって証明されています。

その意志を強制するための、あるいはその意図を促進するための民事権力の有無。

4. 主の使徒や弟子たちに対するイスラエルの教会のこの事件と同様に、いかなる教会も、評議会も、委員会も、その他の役員の団体や団体も、あるいは

他の人は、自分の交わりのメンバーが何を信じるか信じないか、何を教えるか何を教えないかについて、そのメンバーがどのようなことをするかを指図する権利を決して持たないかもしれません。

聖書に示されている4つのケースは完全に平行しています。いずれの場合も、宗教における支配を試みる権力は、天の神によって直接反対され、暴露されたため、「絶対に間違っている」ことが神によって示され、また、いずれの場合にも、宗教における個人の権利が永遠に正しいことが神によって示された。

4つのケースのそれぞれに、別個の原則が関与し、説明されています。4番目のケースでも、前の3つのケースのそれぞれと同様です。ネブカドネザルが礼拝を要求したのと同じくらい間違いでした。礼拝を禁止するメディア・ペルシャの法律が間違っていたのと同じくらい間違いのない。イスラエルの教会が、主イエスに敵対する意志を実行するために民権を利用したのと同じくらい間違いでした。同じように、この同じ教会が、教会員が主イエスと神の御霊によって知っている真理を教えたり説教したりすることを禁じたのと同じくらい間違いでした。

そしてネブカドネザルの場合、原則として、いかなる君主もその君主のように合法的に行動することはできない。メディアとペルシアの法律の場合、その法律と合法的に類似する法律は存在し得ないという原則があります。

教会組織がキリストに対して市民権力を行使する場合、原則は、いかなる教会も、教会の秩序や組織も、いかなる形であっても市民権力を行使することはできないということです。使徒に対するイスラエル教会の場合と同様に、原則として、いかなる教会も、教会の秩序、組織、宗教法人も、その教会の公権力と同様の方法で行動することはできない。

いいえ、当時の教会管理に対するガマリエルのアドバイスは正しかったし、これからも永遠に正しく、あらゆる委員会、評議会、教会管理に対する永遠の神の指示である、「彼らを放っておけ」。もしこの説教やこの働きが人間から出たものであれば、それは滅びるでしょう。でもそれが神からのものなら何もできない

あなたはそれを破壊することができます。そしてその場合、あなたがそれをどのように破壊したいとしても、あなたは自分が一人で神と戦っていることに気づくでしょう。この側面は神の領域にあります。

それはあなたの管轄権のみに依存します。それをそこに残して、神を信頼し、自分のために神に仕えなさい。そして他の人にも自分の望むように同じことをさせてください。

これも自明の理として十分明らかである。さて、

聖霊は各個人に与えられ、その人を「すべての真実に」導きます。神の真実は無限かつ永遠です。したがって、クリスチャンが導かれなければならない無限かつ永遠の真実が依然として存在することは常に真実です。物事の性質上、無限かつ永遠のスピリット以外に、人を神の真実に、あるいは神の真実に導くことは不可能です。したがって、すべての魂は、この無限かつ永遠の真実において、無限かつ永遠のスピリットによって導かれるために、無限かつ永遠に自由でなければなりません。

これ以上のことを言うことは、神の真実を制限するだけであり、真実と神についての知識における心の進歩を制限することになります。あらゆる進歩の可能性にブレーキをかけることです。もしイスラエルの教会が支持する原則が認められ、その命令が主の使徒や弟子たちに従っていたら、今日の人類と世界の状況を想像してみてください。しかし、これ以上のことを言うことの究極の不正は、それが永遠の御霊の代わりに単なる人間の法廷を認め、認可し、設立し、罪深い人間の集団にその無限で永遠の御霊の特権を着せることである。真実へのガイドです。

しかし、これらすべてが真実の現れであることは明らかですが、使徒時代の終わりからこの時まで、教会内には単一の教会「組織」または宗派が存在せず、現在も存在していないことも嘆かわしいことに事実です。ユダヤ教会が使徒たちの場合に行ったのと同じ原則を支持せず、同じ立場をとり、同じことを行った世界。そして今日、最後に誕生した宗派を含め、世界には、いかなる形であっても、真実と教えにおいて神の御霊によって導かれる宗派の個々の会員の自由の権利を認めている宗派は存在しません。そして宗派当局者が知らない、あるいは直面したくない真実を説くこと。そして、会員がそのように導かれ、神の御霊と御言葉によって知っている真実を教え説教するとき、直ちに宗派の事務が目覚め、その機構が、御霊そのものの中で、同様の方法で動き始めるのです。ユダヤ教の教会の事務所と機構のために、彼はその名前で教えたり説教したりすることを禁じられています。そして、使徒たちがしたように、彼がそのような行動や命令を無視し、失敗しないことを選択した場合、

真実とイエスの知っている方法でイエスを教え、説教すると、使徒たちがそうであったように、イエスは迫害され、追放されます。(2)

(2) 彼らは彼を会堂から追い出すだろう。そう、望む者にはその時が来るだろう
あなたを殺す人は、神に奉仕していると思っています。ヨハネ 16:2。

そして、これがまさに、世界に 365 以上の宗派が存在する唯一の理由です。

しかし、この不法行為は決して終わることはないのでしょうか？いつか、キリスト教徒の間で個性の権利と信仰と信念の自由というキリスト教の基本原則が認識される日が来るか、あるいは決して来ないでしょう。

神聖な真理への方向性は？いつか来るか、来る必要はないが、聖霊がすべての真実の導き手であることを認識し、聖霊が導く権利と自由を認識し、その真理の御霊によってすべての真理に導かれるすべてのクリスチャンの権利と自由を認め、またこの真理の御霊によってあらゆる真理を保持し、教え、説教する自由をすべてのクリスチャンが認めるでしょう。、導かれるかも？

そういうことを確認すべき時期ではないでしょうか。キリスト教の原則が認識され、そのような状況がキリスト教徒の間に広まるべき時が来たのではないのでしょうか？世界ですら、君主と独裁者は個人と宗教の自由の完全かつ完璧な権利を認めなければならないという原則を学びました。世界ですら、法律は個人と宗教の自由の完全かつ完全な権利を認めなければならないことを学びました。

世界ですら、教会は自らの意志を貫くために市民権力を統制してはならないが、説得の分野において完全かつ完全な権利を認めなければならず、したがって個性と自由の自由で完全な権利を認めなければならないことを学びました。そして今、教会自体が、信仰、御霊、真理における個性と自由の自由で完全な権利を認めなければならないということを決して学ばないのではないのでしょうか？キリスト教会は、その起源と存在の基本原則をその完全な真実性において認識することを学ぶ時期に来ているのではないのでしょうか？そして、どの宗派も自らの起源と存在に関するこの基本原則を学んだことも認識したこともないとするば、世界中の個々のキリスト教徒がキリスト教徒としての自分自身の起源と存在に関するこの基本原則を認識し、絶えず実践することが二重に良い時期ではないのでしょうか。キリスト教会の起源と存在の基本原則は何ですか？

そういうことになります。個性と自由の神は、神がこのすべての時代を通じて、明確にし、維持するために驚くべきことに絶えず努力してきた、信仰と真理における個性と自由に対する神の原則と権利が、永遠に反対され抑圧されることを許さないであろう。そしてキリスト教会やキリスト教徒の代表も乏しい。いいえ、その真実、その素晴らしい真実は、キリスト教会とキリスト教そのものの存在において、そしてその存在にとっての根本的かつ最高の真実である、その神聖な真実は、今後も広く普及し、世界と世界における独自の神聖な位置を永遠に維持するでしょう。教会。キリスト教の宗教と教会のこの神聖で根本的な真理を信奉する人々は、初めから彼らが世界の真のキリスト教会であったように、今も永遠に彼ら自身であり、キリストがそのためにご自身を捧げたあの「栄光の教会」を構成するでしょう。教会を、「彼は言葉によって水の洗いによって神聖化し、清めるであろう」。それは、その輝かしい出現の際に、彼が「しみやしわなどの何もない、しかし神聖で傷のない輝かしい教会を自分自身に提示するためである」。

なぜなら、使徒たちに対するイスラエル教会の歴史全体を通して、すべてのクリスチャンが最も厳粛に考慮するに値する真理が、超越的な意義をもって広まっているからである。この真実は次のとおりです。

それまでは真の教会であり、主によって呼び出され、守られていたものは、その後、真の教会ではなくなりました。

完全に;そして、その教会が軽蔑し、禁止し、迫害し、追放したものが、それ自体で真の教会となったのです。

そしてそれはいつもそうだった。ヨハネ 9:34-38。

第5章

宗教の自由 個人間

聖書は、宗教における個人の神聖な権利は、専制君主制の存在下では最高のものであると明らかにしています。政府の政令、法令、または法律の存在下で。民権を掌握する教会の存在下で。そして教会そのものの前で、さらにその会員の中でさえも。

他に考えられる関係は、個人と個人の関係だけです。しかし、いかなる独裁政治も、いかなる正当な政府も、いかなる教会も民権を掌握せず、いかなる教会もその会員の輪の中にはいかなる権威も、管轄権も、権利も持たないことが神の御言葉から明白かつ肯定的であるとき、個人の最高かつ絶対的な権利の存在下で宗教問題を扱う場合、宗教問題に関しては、いかなる個人も他の個人に対していかなる権限、管轄権、権利も持つことができないことは確かです。

これ自体は明らかですが、この主題とこの主題の他の各段階について、聖書から少なくとも何かを学ぶのは良いことです。

信仰は神の賜物であり、個人にとってイエス・キリストは信仰の創始者であると同時に完成者でもあります。したがって、物事の性質上、宗教の重要な要素である信仰の行使に関して、キリスト以外のいかなる者も、いかなる正義においてもいかなる権威、管轄権、権利を持つことも決してできないのです。キリストは信仰の創始者であり完成者でもあるため、信仰とその実践、つまり宗教に関するすべてのことにおける唯一の主権と管轄権はキリストにのみ属します。

聖書にあるように、「あなたが持っている信仰は、神の前で自分のものにしてください」。ローマ人への手紙 14:22。信仰は神の賜物であり、キリストはその作者であり完成者であるため、神、キリスト以外に何かを負う人は誰もいません。信仰またはその実践、つまり宗教に関するあらゆる責任。これは宗教における完全な個性の根拠であり、保証です。

したがって、神の言葉は個々の信者に永遠に書き残されます。「信仰の弱い人は歓迎しますが、意見を議論することはお断りします。」自分の疑わしい考えを判断しないでください。疑いを止めることもありません。彼を「裁く」ことも「軽蔑する」こともありません。ローマ人への手紙 14:1-3。

クリスチャンが他人を「議論」したり、「決定」したり、「裁いたり」「軽蔑したり」できない神が与えた理由は、「神が歓迎した」からであるということ、永遠に観察し、永遠に認めてください。

「神は彼を歓迎した」のですから、この人も「歓迎」します。
彼の信仰に基づいて「神は彼を歓迎した」のですから、彼の信仰によっても彼を「歓迎」します。

彼は「信仰が弱かった」にもかかわらず、神は「彼を歓迎した」。したがって、たとえその人が「信仰が弱い」としても、導きは「彼を歓迎しなさい」というものです。

彼は「信仰が弱い」のですが、弱いのは「信仰」なのです。そしてその信仰において、そしてその信仰によって彼は救われるのです。この信仰は魂を救うために与えられた神の賜物です。そして、この信仰を持つ者は、たとえどんなに弱くても、信仰による神の救いを持っています。この信仰の創始者であり完成者はイエス・キリストであり、この信仰を持つ者は誰でも、魂の永遠の救いのためにこの信仰の祝福された業を完成させるためにキリストが自分の中で働いてくださいます。この信仰を個人は、それを与えてくださった神に対して、そしてその作者であり完成者であるキリストに対して維持しなければなりません。信仰は、それを所有するキリストを通して神から与えられたものであり、それは神に対してのみ向けられます。

キリスト;そしてこの信仰において、あなたの責任はキリストにおける神に対してのみあります。

したがって、「信仰の弱い人を歓迎してください…神が彼を歓迎してくださったからです」。神は信仰の創始者であり完成者であるキリストを通して「信仰」を与えてくださる方であるため、「信仰を持つ」各人の責任はキリストにおける神に対してあります。したがって、「信仰の弱い人を歓迎してください。しかし、意見を話し合ってはなりません」。神は信仰をもって彼を受け入れ、信仰において彼は神の前でのみ責任を負うのであるから、その人を軽蔑したり裁いたりしないでください。他人の僕を裁くのか？」4節。たとえ人間の僕であっても、正義においてこれは不可能です。まして、彼が神の僕であり、「信仰によって」神に受け入れられ、受け入れられているのであれば、なおさらです。

そして、あなたと私がまだ受け入れていない人、あなたも私も支持しない、支持しようとしらない人を神が「信仰によって」支持し、普及させるとき、その人は神の前で「信仰によって」完全に安全です。そして、彼は「弱い」にもかかわらず、神は、ご自身が与え主であり、創造主であり完成者であるキリストであるという「信仰をもって」彼を歓迎したのです。そして、私とあなたについては、この問題全体において、「立っている者は倒れないように気をつけなさい。」

宗教的な性質のものにおける人間の完全な個性を示す別の項目は、すでに述べた言葉のすぐ後に続きます。他の人も毎日同じように判断します。誰もが自分の心の中で明確な意見を持っています。」5節。

この聖句は、すべての日が同じであると言っているのではありません。しかし、「日によって違い」を生む人もいるというだけです。聖書は、すべての日が平等に創造されるわけではないという真実を完全に明確にしています。神が特別にご自分のものとされた日があり、人間の永遠の利益のために他の日と区別された日があるということです。この日は「あなたの神、主の安息日」です。

これは神の言葉から見て真実ですが、この日を守るか守らないかに関して、主の言葉は「人はそれぞれ、自分の心の中で明確な意見を持たなければなりません。」と明確に述べています。

この声明の中で、彼は宗教における個人の完全な優位性と絶対的な権利を再度確認しています。

ところで、この項目では、最近顕著になっている休日遵守の義務化の問題について触れています。しかし、その日の行事や考慮に関するすべてのことにおいて、すべての人に対する神の御言葉は次のとおりです。昼と昼を区別する者は、主のためにそうするのです。」

主のために考慮されず守られない日は、まったく真に考慮されず守られていません。というのは、その場合、そこには本当に考慮すべきものは何もないからです。その日を選び、区別し、脇に置いたのは神です。したがって、その日の行事は神のもので、そしてそれは神と信仰と良心の個人との間にのみ存在します。したがって、法律、法令、警察、法廷、迫害によって課せられた休日の遵守は、第一に、神の領域と個人の信仰と良心の領域への直接の侵害である。 ;そして二番目の場合には、それはその日の行事ですらないし、決してそうなることはありません。なぜなら、それは心の中で説得力を持たないからです。

神はご自身が選んだ神聖な日を定められました。それは本当です。彼はすべての人々に自分を観察するよう訴えています。これも真実です。しかし、この日の行事や考察において、神の言葉は、それが完全に個人的な問題であることを明確に明らかにしています。「人はそれぞれ、自分の心の中に明確な意見を持たなければなりません」。だれかが心の中で完全に説得されず、それゆえに主の日を守らないとき、その責任は神に対してだけあり、いかなる人にも、いかなる集団にも、いかなる法律にも責任はない。政府、あるいは地球上の権力。

この項目に続くのは、キリストと神の裁きという恐ろしい事実を考慮して、宗教における完全な個性を認めるようという訴えです。この訴えは次のように表現されています。そしてあなた、なぜ自分のことを軽蔑するのですか？なぜなら、私たちは皆、神の裁きの座の前に現れるからです。「わたしが生きる時、主は言われる、わたしの前にすべての膝がかがみ、すべての舌が神を賛美するだろう。」と書いてあるとおりです。 10、11節。

私たち一人一人は、キリストと神の裁きの座の前に出て、そこで裁かれなければなりません。それでは、宗教に関係する事柄について、私たちの誰かが他の人、あるいは他の人全員から裁かれるよう求められるということが、どのようにして正義においてあり得るのでしょうか？それは、私たちがキリストの裁きの座の前で答えなければならない事柄についてです。

いやいや。「一人は立法者であり裁判官であり、救い、創造することができる人である」滅びる;しかし、隣人を裁くというあなたは何者ですか？」ヤコブ 4:11。

したがって、キリストと神の法廷が存在しなければならず、私たち全員がその前に出て、それぞれが「肉体で犯した行為」について答える必要があるという事実は、宗教における完全な個性の最も強力な保証であり、最も強力な訴えの一つであるすべての魂がそれを認識できる可能性があり、

いつも。

最後に、宗教における完全な個性の思想と真実全体が、靈感による結論の中で見事に要約され、力強く強調され、明確に表現されています。

「それでは、私たち一人一人が神に自分自身の説明をすることになります。」詩

12.
第6章

宗教の自由 !神とシーザー !

イスラエルの教会の場合、キリストを信じ、キリストに関する真理を教えることを決意した教会員に対して、原則は次のとおりです。

いかなる教会も、その教会の個々の会員の信仰や教えに関して、いかなる権威、管轄権、権利も持たないことを完全に明らかにしました。第4幕と第5幕。コリント第二 1:24。

いかなる教会にも権威、管轄権、または権利がまったく存在しないことを説明するだけでなく、信教の自由という偉大な真実の追加の原則を明らかにする、もう一つの注目すべき文章があります。

この注目すべき聖句は、スパイのパリサイ人とヘロデ派が「カエサルに敬意を払うことは合法ですか?」という微妙な質問をイエスのところに来たときのイエスの言葉を含むものです。イエスは貢物を手にしてこう言いました。「これは誰の像と碑文ですか。彼らは答えた、「カエサルからです。」そこでイエスは彼らに言われた、「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に与えなさい。」

ここに二人の人物、神とシーザーが明らかになります。宗教と市民という二つの権力。神と人間という二つの権威。二つの管轄権 - 天と地の管轄権。そして、神の指示により、人間は何事も従うべきである、あるいは従うべきであるのは二人だけです。

神に属する管轄権と権威、権力と権利があります。カエサルに属する管轄権、権力、権利もあります。

そして、これら2つはまったく異なる分野です。カエサルのものがある。そしてそれは神ではなくカエサルに提出されなければなりません。神から来るものもあります。そしてこれはカエサルではなく神に提出されなければなりません。GODにのみ直接提出する必要があります。それはカエサルにも、またカエサルのために神にも提出してはならない。

もともと存在したのは1つだけ、そして最終的には存在することになるのは、ただ1つの分野、唯一の管轄権、唯一の権威、唯一の権力、唯一の権利、つまり神だけのものです。コリント人への第一の手紙 15:24-28。

もし罪が世界に浸透しなかったら、神のみの領域、他の管轄権、権威、権力、権利は存在しないでしょう。

たとえ罪が入り込んできたとしても、もし福音がこれまで地球に住んでいたすべての個人に受け入れられていたなら、神のみの領域、管轄権、権威、力、権利以外には決して存在しなかっただろう。エペソ人への手紙 1:7-10。コロサイ 1:20-23。

しかし、誰もが福音を受け入れるわけではありません。したがって、誰もが神の主権、管轄権、権威、権力、権利を認めるわけではありません。道徳的かつ霊的なものであり、それを認識するすべての人を道徳的かつ霊的にする神の王国、意志、目的、力を認識していないので、罪人である彼らは礼儀正しくすることさえできません。したがって、世界には、道徳的になることを望まない人々を文明的に導く管轄権と権力がなければなりません。

そしてそれが国家であり、民権である、カエサル。そしてこれがその存在理由です。

物事の性質上、領域と管轄権は2つだけです。道徳的なものと市民的なもの、精神的なもの、物理的なもの、永遠的なものと一時的なものです。1つは神から、もう1つはシーザーから。この2つの分野と管轄区域があり、それ以上はありません。そして、合法的に他に存在することはあり得ません。そのうちの1つは神の領域と管轄権です。もう一つはシーザーのものです。

神の言葉によれば、これらは2つであり、おそらく存在し得るのはこの2つだけであるため、教会には王国も支配権も、分野も管轄権も、いかなるものための場所も存在しないということは排他的かつ絶対的に帰結します。。

したがって、僭越や篡奪がなければ、いかなる教会もいかなる王国や統治権、いかなる分野や管轄権を持つこともできないことは完全に明らかです。教会はカエサルのもではありません。そして、僭越と篡奪がなければ、教会がカエサルの管轄権を何ら行使することは不可能である。カエサルの領域と管轄権、つまり国家、民権は完全にこの世のものである。教会は、あらゆるものを含めて、「この世のもの」ではありません。したがって、教会が僭越や篡奪なしにカエサルの領域を占領したり、完全にこの世のものであるカエサルの事柄に対して管轄権を行使したりすることは不可能である。

したがって、教会に関する限り、カエサルに関する限り、神に関する限り、教会についてはなおさらのことです。教会はカエサルではありませんし、カエサルになることはできません。ましてや、教会は神ではないし、神になることもできません。そして、この教会は、「罪の人」、「滅びの子」、「不法の奥義」、「神の時代に座し、神として現れたいと願っている」といった容赦のない言葉で述べられた靈感を抱いてはいないだろうか。王国を持って支配権を維持し、野原を占領して神の管轄権を行使することを想像したでしょうか？自分たちが王国であり、支配権を持ち、領土を占領し、神の管轄権を行使することが自分たちのものだと思い込んでいる教会は、究極の傲慢であり、僭越であり、横取りであるという真実を完全に明らかにするには、それ以上のことが必要でしょうか？

しかし、教会は神の王国ではないのか、と問われます。そうです、そうです。ただし、「教会」という用語で私たちが語るのは、靈感による御言葉に表現されている教会の神聖な概念、つまり「満ち足りたもの」についてのみです。すべてをすべてで満たす方のことです。」 「教会」という言葉の使用においてこれだけが意味を持つとき、それは真の神の王国です。しかし、「教会」という言葉によって、人間の概念、宗派や宗派、地上の「組織」の意味を与えたい場合、この世界にこれまで存在した教会が神の王国を表しているということは真実ではありません。

しかし、そのようなものが実際には教会であり、したがって神の王国であると仮定してください。たとえそうであったとしても、ここが真に神の王国であるためには、そこに王として神が存在することによってのみ可能であることは依然として真実でしょう。そして、神が王である場合、神は王であり、すべてのものの主です。神は分裂した王国では決して王ではありませんし、また王になることもできません。神は決して自分の王国を他の人と共有することはありませんし、またそれができませんでした。神が真に実際に王でなくても、真に実際に神の王国が存在し得ると主張したり暗示したりできる人がいるのでしょうか。そしてすべてを支配する王は何ですか？いいえ、そこには神が王であるに違いありません。そうでなければ、そこは実際には神の王国ではありません。彼はそこにいるすべてのものとすべての人の王であり主である必要があります。そうでなければ、それは真実ではなく、実際には神の王国ではありません。領土は神によって占領されなければならず、司法権は神によって行使されなければならず、原則は神のものでなければならず、政府は神のものでなければならず、像と碑文は神のものでなければならず、これらすべてが排他的にそうでなければ、それは効力を持ちません。そしてまさに神の王国。

人間の魂と霊は、人間がこの世に存在するように、世界がそうであるように、意図的に、そして当然のことながら、神の王国です。そこでイエスは、邪悪で不信仰なパリサイ人たちに向かって、「神の王国はあなたたちの中にある」と宣言されました。しかし、失われた人類では、この王国は奪われ、この分野は別のものに占領されます。篡奪者は王位に就き、奴隷化し、貶め、破壊する司法権を行使している。

したがって、意図的に、そして当然のことながら、王国は神のものですが、実際には、それは神のものではなく、別のものです。したがって、失われた奴隷にされた魂が、この疎外された領域で神を歓迎し、この玉座に代わってくださいますように。

篡奪され、そこで真の管轄権を行使するためには、その魂、霊、生命は、真実においても事実においても、また意図においても権利においても、神の王国となるであろう。そしてそれでも、それは真実だけの神の王国であり、神によれば、その魂にとって、神はすべてにおいて、すべての上にある王です。教会も同様です。

神の教会はまさに神の王国です。それは「すべてをすべてのうちに満たす神の満ち足りたもの」です。それは神のものだけで構成されています。そして彼は王であり、彼の王国の唯一の指導者です。この分野における管轄権は神のみにあります。政府の原則、政府の権威と権力は主のもののみであり、王国のすべての国民は主のみに忠誠を負っています。そしてこれは直接、キリストにおいて、聖霊によってです。この領土のすべての住民は神の管轄権のみに服します。そしてこれは直接、キリストにおいて、聖霊によってです。神の王国であるこの教会のすべての会員は、神だけの、そして神だけの原則によってインスピレーションを受け、動かされています。そして神の権威と力のみによって統治されます。そしてこれはすべて、キリストを通して、聖霊を通して、神から直接のものです。

したがって、神の王国である真理の神の教会の一部であるすべての人は、自分の心、魂、思い、力のすべてを神に捧げます。これらはまた、カエサルのものである貢物、税金、名誉を代わりにカエサルに捧げます。ローマ人への手紙 13:5-7。

したがって、もう一度言いますが、神とカエサルの間には、あるいは神とカエサルの間には、人間が何かを服従すべき第三者、当事者、権力、分野、管轄権などは存在しません。

神とカエサル以外には、いかなる王国や自治領、いかなる権力や管轄権にも何かを服従させるという神の側の命令や義務はありません。存在するのは神とカエサルの2つだけです。教会の彫像や碑文はなく、それらを置く余地もありません。

これは単純に、神がなければ、そして全体として神の代わりに神がなければ、どんな教会も単なる無に等しいことを意味します。そして、そのような教会が何かになろうとするとき、それは何も無いより悪いだけです。そしてどちらの場合も誰も私たちはそのような種類の教会に対しては決して何の借りもありません。

一方、教会が真に神と共にあるとき、そして彼が本当に彼女に対して全力を尽くしているとき、それはまさに神の王国からのものです。そして、たとえ王国、統治権、管轄権、権威、権力はすべて神のものであり、神のものではありません。したがって、義務付けられているものや提出されたものはすべて、教会からではなく神からのものです。したがって、いかなる場合においても、誰かが教会に提出すべきものや提出すべきものは決してないということは、厳密かつ文字通りに真実です。

したがって、誰かが実際に何かを負っている、あるいは服従しているのは、神とカエサルから、たった二人の人間、二つの王国、二つの管轄区域、二つの権威、二つの権力だけであることが再び強調される。この2つだけで、それ以上でも、他でもありません。

したがって、このためには、教会が、その使命と世界におけるその地位に忠実であるためには、神に完全に献身し、神に完全に参与し、神に没頭し、神が望むときに神だけが知られ、現れるようにする必要があります。、そしてあなたが何であっても、何をしても。

まさにキリスト教の精神において、これは確かに真実です。なぜなら、これこそまさに、世界中の個々のクリスチャンの使命であり態度であるからです。つまり、神に絶対的に献身し、神に完全に参与し、神に没頭することで、自分のありのままのすべてのの中に神だけが見えるようになる、つまり「神は肉体において現れる」ということなのです。

そして教会は個人のクリスチャンだけで構成されています。教会もまた、

「キリストの体」、そしてキリストは自己を完全に空にする、そうです、まさに消滅させる神の顕現です。そしてそれが神の神秘的なのです。

まさにここが、キリスト以前も以後も、教会がその使命とその場所を見失った場所です。自分自身何かになることを望んでいた。彼にとっては、神がすべてであるというだけでは十分ではありませんでした。王国、統治権と管轄権、権威と権力、言葉と信仰が完全に神からのものであるだけでは十分ではありませんでした。彼女は王国そのものを熱望した。独自の分野と管轄区域に。保証できる権限。彼が行使できる力。話せる言葉に。そしてそれを決定づける「信仰」へ。

この野望を満たし、この願望を具体的なものにするために、彼は神を拒否し、神とカエサルの方方に属していた王国と支配権、分野と管轄権、権威と権力を引き受け、篡奪しました。そして、神でもカエサルでもなく、単なる自己構成的で自己高揚した仲介者であった彼らの混乱と物事の混合は、不法行為を増大させ、世界への呪いを深めただけでした。

これはまさに、どの時代においても、両方の聖書においても、神が彼女に対して課している告発である。栄光と美しさ、名誉と威厳、権威と力、甘美な影響力と神聖な魅力、それらはすべて彼女のものであり、彼が彼女とともに住み、彼女と一緒にいるという理由で、かなりの部分が彼女のものになった。これらすべてのことを彼女は自分自身に傲慢にし、自分のものだと思い込んでいた。

エゼキエル 16:11-19 を読んでください。ローマ人への手紙 1:7-9。テサロニケ第二 2:2,3;黙示録 17:1-6.

神が彼に、「全世界に渡って」語られる真の神聖な信仰を与えたとき、彼は自分の信仰が全世界の信仰であるに違いないと思い込み、「信仰」に帰属し、命令する権利を自らに与えました。」と全世界に向けて語り、彼が指示した「信仰」は真実であり、神に由来するものであると主張した。

神が彼女に話すのに完璧な純粋さで御言葉を与えたとき、彼女が話すときそれは神の声と同等になるように、彼女はこれに基づいて自分の声は神の声であり、その言葉は神の声であると主張して自分を高めました。彼女が言ったので、それは神の言葉であると決めました。

神が彼にあまりにも完璧な真理を与えたので、彼自身がこの真理について語ることは全権威を持って語られたことになり、これに基づいて彼は自分には語る権威があると思い込んだ。したがって、彼女が話すべきときは、彼女が話しているのだから、誰もが従うべきである。

神が彼女に、悪魔さえもその力に服従し、神に従わなければならないほどの力を与えたとき、彼女はその力が自分のものと思い込んだ。そして、世界中のすべての人々と国家に、それに服従し、従うよう強制する力さえあります。

このように、彼女は何事においても、自分がしがみつき、しっかりと保持すべきものであると本気で思い込んでいました。「神と同等であること」の「篡奪」。しかし、教会や教会になるであろうあらゆる人やすべてのものは、それを神にしがみつくべきもの、神と同等であるなど考えるべき篡奪であるとは決して二度と考えるべきではなく、教会がどのようにそれ自体を空にするかだけを考えるべき時が来ました。自分自身について、自分を何の評判も持たず、僕の姿をとり、へりくだって、死に至るまで、さらには十字架の死に至るまで従順になること。そしてこれらすべては、神がご自身の人格とその中の霊のうちに現れるためです。そしてそれを通して世界へ。

どの教会も人々を自分たち自身に呼び寄せるべきではなく、キリストだけに呼び寄せるべき時代が来たのです。教会自体が何よりも、第三の王国、管轄権、権力など存在せず、神とカエサルの二つだけがあることを明らかにすることに関心を持たなければならない時が来た。そして、彼女が神の教えについて人々に勧めなければならないとき、「したがって、カエサルのはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」

教会があらゆることにおいて「キリスト・イエスにもあった」と同じ感情、つまり「神と同等であることを篡奪である」と判断してはならないという感情だけを抱かなければならない時が完全に到来した。しかし、神が現れるように、自分自身を完全に空にすることです。生ける真の神であり、神はすべてにおいて存在しておられるのです。すべての唯一の王であり主であられる方は、教会において、教会のために、そして教会は「すべてをすべてのうちに満たす方の満ち足りた方」です。

あまりにも長い間、国家と教会は神の権威を奪い、神の代わりに王国を引き継いできました。今、天の輝かしい声の偉大な言葉が地上に聞こえるであろう時が完全に到来しました。王。"黙示録 11:17。

第7章

宗教の自由 要約

私たちはすでに、神の御言葉の中で、宗教における個人に対する神の権利の原則を確認しました。この原則は、独裁政治、至高の政府と法の柔軟性のなさ、国家と教会の結合、個人。

どうか誰も、これが単なる古代史の一連の研究であるとは考えないでください。また、それ自体が聖書の原則と聖句のみの研究であるとは考えないでください。ただし、いずれの分野においても、この研究は十分に正当化されるでしょう。それはそのようなことではなく、むしろ、ある段階で完全に効力を持ち、今日そして常に有効である原則の研究です。これらの研究で取り上げられた一連のイラスト全体が再び有効になり、活発になる時が必ず来るはずであり、そう遠くないでしょう。そして、全員が同時に、それぞれがその場所と時間にいたのと同じように、真に同じ目的で。

独裁国家、至上主義と法の柔軟性のない政府、政教一致、教会そのものが、あたかも心をつにしかかのように、一致団結して服従と要求を要求する日が来るだろうし、そう遠くない。宗教の統一性。そして、宗教における個性のあらゆる提案とそれに対するあらゆる種類の権利を粉砕することです。

これらの研究は特に、間もなく起こることを考慮して発表されました。聖書に書かれているこれらすべての事柄は、常にすべての人々を指導するためだけでなく、特に「時代の終わりに来た人々への警告」のために、靈感の霊によってここに確立されました。この世界の経験上、悪の勢力と正義の王国との間の最も強力な最も大規模な紛争は、これから到来します。その時は今すぐそこまで来ています。だからこそ、この靈感を受けた記録から得られる教訓が今、極めて重要なのです。

これらすべての情報源からの多大な圧力、そして間もなくすべての個人に課せられるであろうこれらすべての勢力による多大な圧力を考慮すると、各個人が自分自身で知り、可能な限り確実な証拠によって知ること、つまり自分自身で知ることが最も重要です。自分自身の確信 - それはまさに、神の御前で、神の前で、主権や権力の前で、個人として、あなたの立場であり、責任であり、あなたの権利である。

これらの聖書研究において、私たちは、これらの権力者には自らを主張したり、宗教におけるいかなる権威や管轄権を行使する権利も持たないが、宗教における個人の権利は万人の前で最高であるという観点から各事例を論じてきたが、反対側 たとえそれが最も重要でなくても、同様に真実であり、同様に重要である - 公然と異議を唱えられ完全に無視されることなく、神以外の者が宗教問題に権威や管轄権を押し付けることを決して許さないことが各個人に残されている。真の契約では、神と権利に対する完全な忠誠、宗教における個人に対する神の権利が維持されるということ。これはすべての個人が神と法律に対して、そして神と法律によって自分自身に対して絶対的に負う義務があります。

この原則は、各個人が維持しなければならず、そうでなければ、その人は神に対して、神の前に一人の人間として自分自身に対して不誠実であることが判明し、権利の代わりに誤りが優先されることを許します。言い換えれば、間違いが正しいことを許容するということです。

靈感による記録が示しているように、ネブカドネザル王の物語に描かれているような独裁政治、メディア・ペルシアの権力に描かれているような法の至上主義による支配、そして聖書に描かれているような教会と国家の結合は真実である。ユダヤ人の教会とローマ勢力がキリストに対して団結し、イスラエルの教会がキリストの弟子に対して示したように、教会自体がキリストに対して団結したこと。宗教における管轄権を主張する権利はない。同様に、そしてさらに強調して、神と義に対して絶対に忠実であること、あるいは自分自身と仲間の人々に対して忠実であることは、3人の若いヘブライ人、ダニエルという男、主イエス、そして主の使徒たちに真実である。この種の主張は絶対に無視しなければなりません。いずれの場合も、神の支配は篡奪されました。いずれの場合も、正義は完全に捨てられ、その場所に悪が確立されました。このような場合、このような時に、神を知っている人、あるいは法律に関心を持っている人が、黙って何もしないことができるのでしょうか。神との契約は何もないのでしょうか？忠誠心は決して知られることがない権利なのでしょうか？エラーだけが優先される権利があると認識されるのでしょうか？人間は決して誠実ではない——神に対しても法律に対しても、自分自身にも同胞に対しても誠実ではないのだろうか？

ネブカドネザルが宗教における権威を行使しようとしたとき、完全に立場を逸脱し、完全に間違った行動をとったのは事実です。そしてその

歴史は、宗教における権威を主張することを前提とするすべての独裁政治が非常に場違いであり、完全に間違っていることをすべての人々に永遠に示すために書かれました。同時に、三人のヘブライ人が宗教における権威の専制的な主張を公然と妥協なく無視したことを覚えておくことは真実であり、同様に重要である。そして歴史は、この二人が神、権利、そして自分自身と仲間の人間に対して忠実であるならば、他のすべての人々は永遠にこの三人が行動したように行動しなければならないことを教えるために書かれたのです。

法の優越性と柔軟性のなさという原則にもかかわらず、メディア・ペルシャ政府が自らの法律に従って宗教の領域に踏み込んだとき、誤った行動をとったのは事実である。そして歴史は、法律に基づいて宗教の領域に踏み込むという点で、どの政府も等しく間違っていることを、すべての政府と国民に永久に証明するために記録されている。ダニエルという個人がその法律を絶対的かつ妥協なく無視したことも同様に真実であり、覚えておくことが同様に重要です。そしてその歴史は、神と正義を敬い、自分自身と同胞に誠実であるならば、同様の状況すべてにおいて、その個人が行動したように行動しなければならないことを、すべての個人に永遠に教えるために書かれたのである。

イスラエルの教会がその意志を有効にするために民権と同盟を結んだとき、非常に不敬なことをしたのは事実である。そして歴史は、どのような口実のもとでも、その意志を有効にするために市民権力を統制しようとするたびに、あらゆる教会が同じ過ちを犯すことを全世界に永遠に示すために書かれたのである。教会と国家のこの邪悪な契約の対象となった個人だけが、それをわずかでも認めるためにそれに服従するのではなく、その契約の下で死ぬだろうということを認識し、覚えておくことも同様に真実であり、同様に重要である。そして、これはすべて、世の終わりに至るまで、すべての人が同様の状況下で、神に忠実であり、真理に忠実であり、自分に忠実であり、自分に忠実であるために主イエスが行動したように行動する準備ができていようようにするために書かれたものです。人種、人間。

イスラエルの教会が、その教会の会員が何を信じ、何を教えるべきでないかを決定する権限を引き受けたとき、正しい道から外れ、完全に間違った行動をとったのは事実です。そして歴史は、教会のメンバーが何を信じるべきか、何を信じるべきでないかを決定する権威を引き受けるとき、どの教会も等しく正しい道から遠く離れており、同様に間違っていることを、すべての教会と人々に永遠に明らかにするために書かれています。...同様に真実であり、覚えておくべき重要なことは、その教会の個々の会員が、いかなる尺度や程度においても、そのような権威を認めることを公然とそして妥協なく拒否したことです。そして、すべての教会員に、神に対して誠実であり、キリストに対して誠実であり、権利に対して誠実であり、自分自身に対して誠実であり、人類に対して誠実でありたいのであれば、各自が同じことをしなければならないことを永遠に教えるために書かれています。

3人の若いヘブライ人は、宗教における独裁の権利を一切認めることを拒否したが、よくやった。ダニエルは、宗教における民事政府の権利を認めることを拒否したとき、うまくいきました。主イエスは、ご自分の意志を強制するために民権を通じて教会が持ついかなる権利も拒否したとき、正しいことを行われました。主の使徒と弟子たちが、教会が何を決定したり命令したりする権利を認めようとしなかったのは正しかったです。

信じて教えるべきか、教えるべきでないか。これらのそれぞれの場合において、神は公然と奇跡的な力で、これらの人々が正しいことを誰にでも完全に明らかにされました。このようにして、彼らが正しかっただけでなく、神的に正しかったことも公然と証明されます。いずれの場合も、そのような態度が神聖に正しいことをすべての権力者と人々が永遠に知るように歴史が書かれてきました。そして、これらの一人一人が自分の代わりに行ったように、神の側に立つ人は誰でも、それを知っていますように。

当時、そして時々、世界に神の名誉を保ち、世界に権利を生かし続けたのは、そのような個人、そして彼らと同じような人々でした。人間社会の中で誠実さと真の勇らしさを保ち続けた人物。そう、まさにこれらの人々、そして彼らと同様の、世界そのものを生かし続けた祝福された人々です。

神の名誉を維持してきたのは、専制政治でも、法治国家でも、政教一致でもなく、教会そのものでさえも、法を忠実に守り、人間の誠実を保ってきた者はいない。すべての歴史は、これらすべてが人間のすべての個性と誠実さを損ない、排除し、権利を抹消し、神を人間と世界の中の本来の位置から排除するためにできる限りのことをしたことを満場一致で証言しています。

いいえ、彼らではなく、神とともに、神のうちに祝福された個人です。彼らは、宗教における個人に対する神聖な権利を知り、維持してきた人々です。これはダニエル、キリスト、パウロ、ウィクリフ、ルターの場合です。彼らは世にも教会にも孤立し、教会と世の両方に敵対しました。彼らは神の名誉を守り、守り続けてきた人々です。神と法と真理の知識を生かし、それによって世界を生かし続けました。

現在、そしてこれからも、それが諸教会の間で奨励され、世界、宗派、国家、国際、宗教と宗教の世界連合に強く求められているとき。これらすべてが、専制政治、政府による法的優位性と柔軟性の確保、民権と提携し民権を管理している教会、そして自らの主導権を持つ教会によって確保するという目標を明確に目的としている場合。これらすべてが宗教における絶対的な権威を確保し、行使するために即時かつ共同で機能するとき、これらすべてを考慮して、今、これまでにないほど、宗教における個人の神聖な権利、つまり完全な信教の自由を知り、宣言し、維持することが不可欠です。。

第8章

宗教の自由と 個性、最高の贈り物

政府は知的生物の存在そのものの本質の中に存在します。なぜなら、「生き物」という言葉自体が創造主を意味するからです。そして、あらゆる知的な生き物と同様に、それが存在しているすべては創造主のおかげです。そして、この事実を認識して、彼は創造主に名誉と最高の献身を捧げる義務があります。これは、物事の性質上、生き物の側の服従と服従を意味します。そしてこれが政府の原則です。

すべての知的な生き物は、そのすべてを創造主に負っています。この面において、統治の第一原則は、「あなたは心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くしてあなたの神、主を愛さなければならない」である。

これはすべての戒めの第一であると主によって宣言されました。それは最初に与えられた戒めなので、すべての戒めの最初ではありません。しかしそれは単に、それがあらゆる知的な生き物の本質と存在の中に存在し、単純な知的な生き物が存在するやいなや、物事の性質の不可欠な部分となるからです。

したがって、これはすべての戒めの最初のもので、それは単に、それが被造物と創造主との間に存在し得る最初の関係に固有の義務の表現であるからです。それはまず、創造された知性の性質、状況、存在にあります。

それは最高かつ最も絶対的な意味でのすべての戒めの最初のもので、それは最初の知的生命体の性質と関係を統合しており、最初の知的生命体が宇宙に単独で出現したときと同じように、将来何百万という連続する個体の場合にも完全なものとして現れます。元のものを超えて生き物の数を拡大したり増やしたりすることは、いかなる意味においても、この第一の戒めの範囲や意味を制限することはできません。彼は、存在し得るすべての知的な生き物の最初の義務として、自分自身を完全に孤独であり、永遠に完全であると提示します。そしてこの永遠の真理は、永遠の原則として個性を区別します。

ただし、2番目の知的生き物の存在が認められるとすぐに、追加の関係が存在します。ここでは、それぞれの創造主に対する主かつ元の関係だけでなく、どちらも等しく創造主の存在に負っているだけでなく、互いに対する付加的かつ二次的な関係もあります。

この二次的な関係は絶対的な平等の関係です。そして、創造主に対するそれぞれの服従と献身において、考えられるすべての関係の中で、それぞれが互いを尊重します。したがって、物事の本質において、つまり2つの知的な生き物の存在においては、本質的に第2の統治原則、つまりすべての主体が平等であるという相互関係が存在します。

そしてこの原則は、すべての戒めの2番目に表現されています。「隣人を自分のように愛さなければならない」。最初の戒めがすべての戒めの最初であるのと同じ理由で、これはすべての戒めの2番目です。それは存在し、第二の知的な生き物が存在するとすぐに、物事の性質と知性を統合します。また、最初のものと同様に、それは2つの知的生命体が存在した瞬間に完全かつ絶対的なものであり、他の知的生命体で満たされた宇宙の存在によって拡張されたり、変更されたりすることはありません。

それぞれの人は、自分自身のために、自分自身の個性において、完全に従属しており、まず第一に創造主に捧げられています。彼にはすべての借りがあるからです。この服従と献身において、何よりもまず、各人は他のすべての知的な生き物を自分と同等のものとして尊重します。創造主の設計の中で自分の位置を占めているのと同じくらい、自分自身と同じように、その設計の実現について個人として、そして創造主に対してのみ責任を負います。したがって、創造主、その仲間、そして自分自身への敬意から、彼は自分自身のように仲間を愛します。そして、この2番目の永遠の真実は、最初の真実と同様に、個別に区別されます。

永遠の原則として。

これが本来の政府です。それはまた、最後の政府でもあります。なぜなら、これらは第一に完全かつ絶対的な原則だからです。そして、それらは知的生き物の性質と関係を永遠に統合するからです。そして、この政府は、すぐに独創的であり、究極的には単なる自治です - 合理性と神における自治です。なぜなら、知性のある生き物が創造主にすべてを負っていることを認識しなければならないのは、合理性の最も明確で最も単純な命令にすぎないからです。したがって、服従と名誉は、生き物としての彼女の側の合理的な義務であると考えられます。同様に、同胞も同様に創造主に対してすべてを負っているのであるから、同胞自身がその点で尊敬され榮譽を望むのと同じように、このすべてにおいて同胞も尊重され、榮譽を受けるべきであるというのは、単純な理性の命令である。

これらはすべて創造されたものであり、その存在においてすべてを創造主に負っているのだから、能力や能力の発揮に付随するすべての存在は、常に厳密に意志に従って維持されなければならない、という単純な合理性の命令でもある。そして創造主のデザイン。なぜなら、創造主は、いかなる被造物の存在、能力、力が神の意志に反して、あるいは神の計画の範囲外で行使されるべきであると決して決定しなかったということは、さらに単純な理性の命令だからである。したがって、この本来の究極の政府である自治は、神の指示の下での自治であるというのが、合理性の最も単純かつ明確な命令である。

神、そして神の中で。これこそが真に唯一の真の自治である。

神はすべての知性を絶対的かつ無料で創造されました。彼は人間を他の知性と平等に、道徳的になるように創造しました。選択の自由は道徳にとって不可欠です。選択できない知性を創造したということは、それを自由にできなくすることになるだろう。したがって、神は人間に、他の知性と同様に決定の自由を与え、常に神が創造者である選択の自由を尊重しました。

この選択の自由の行使において、ある知性が、その結果としての能力と力を伴う自らの存在が、厳密に創造主の意志に従い、創造主の計画の範囲内で費やされるべきであり、実際、創造主とともに費やされるべきであると決定するとき。そして創造主にとって、これは本当の意味で厳密かつ真の自治です。

そして、各知性の崇拜、崇拝、同盟が完全に自らの自由な選択に従わなければならないとき、これは最高かつ真の支配者である神の側に、被統治者の同意による統治の原則を明らかにすることになる。

このように、神の政府は、支配者と被支配者、創造主と被造物の両方に関係しており、完全な自由の政府によって同様に救済されることが実証されています。そして完全な個性による完全な自由。

罪によって人間は自由を失い、したがって個性を失いました。しかし、キリストの賜物によってすべてが回復されました。「捕虜の解放を宣言するために私を遣わしたのです。」「キリストは、私たちが神のもとに導くために、義人が不義人のために罪のために苦しみました。」

したがって、キリスト・イエスは、人間を連れ戻し、人間が失ったものを取り戻すために、天からこの世に来られました。個性は創造主からの最高の贈り物でした。秋にはそれが失われてしまいました。キリストの賜物によって、個性という賜物が人間に回復されました。

カインからティベリウス・カエサルに至る長い罪と帝国の専制の時代に、人間は継続的かつ組織的に抑圧され、個性の痕跡をことごとく奪われてきた。それからキリストは人間として人間の肉体をとってこの世に来られ、人間の経験のあらゆる段階を通して、人間の個性をそれ自身の本来的かつ永遠の基礎の上に確立されました。マタイ 25:15。したがって、キリスト教本来の純粋さがなければ、真の個性はあり得ません。

しかし、専制主義の利益のために、キリスト教の名前そのものが歪められてきました。そして、帝国主義の教会による専制政治の長い年月を通じて、人間は再び組織的に個性のあらゆる痕跡を奪われました。宗教改革の際、神は再び人間にキリスト教と個性を回復させました。しかし、プロテスタントは形式と信条において硬化しました。そしてプロテスタントのあらゆる形態と宗派は、キリスト教徒の自由と個性を否定し、破壊するためにあらゆることを行ってきました。宗派、国家、国際、世界の連合、そして帝国主義の教会専制主義が再びあらゆる世界強国、欺瞞的な兆候と偽りのて宗教と宗教の連合、驚異とともに機能し、最終的に人間から個性のあらゆる痕跡を組織的に奪うであろう。

しかし、キリスト教は、これまでと同様に、その個性という最高の賜物において、今、そして最終的にすべてに勝利するでしょう。黙示録 15:2,3。そして、場合の性質上、個性を通じて勝利するキリスト教は、これまでと同様に、祝福された個人の中で、そして祝福された個人を通してのみ勝利を収めます。神の指示の下、神と共にある個人、宗教における個人の神聖な権利と完全な信教の自由、個人を完全な誠実さで維持する個人は、個人主義ではなく、常に心に留めておいてください。「主義」。

第9章

宗教の自由と

日曜日の法律

日曜法はどこから来たのでしょうか？

その由来は何でしょうか？あなたの性格は何ですか？

それは州、米国、そして世界の人々にとって何を意味するのでしょうか？

これらの疑問は、今日の米国のあらゆる場所で顕著に関連しています。というのは、州や全国では日曜法制定が普遍的に議会に要求されており、州議会では日曜法が常に奨励されているからである。

別の理由からも、これらの質問は関連性があるだけでなく、完全に重要です。この理由は、日曜日の立法を通じて行われるためです。宗教における全世界の支配のためには、すべての独裁国家、すべての法的政府、すべての教会と国家の連合、そしてすべての教会そのものが、宗派、国内、国際、世界の宗教連合からの圧力を受けて協力し、統合されなければならない。連邦に向けた世界的な動き

宗教における世界の影響力は、日曜日と法律によって課せられた日曜日という 1 つのことで顕著に頂点に達します。

その由来と性格

日曜日を支持する最初の法律はコンスタンティヌスに由来します。それは教会に由来し、司教の主導権と要求によってのみ課されました。これは、法律の条項自体からだけでなく、法律の事実や状況、また法律だけでなく時代の歴史全体からも明らかです。

この主題に関する最初の法律は西暦 314 年頃のもので、その中には 6 番目の法律が含まれていました。フェアも日曜日も。そして、この法律の意図は特に宗教的なもので、金曜日と日曜日は「その日をより少ない中断で過ごすことができるように、裁判所やその他の役所の業務を抑制すべきである」と定め、命令していた。献身的な目的」。

これは、日曜日の遵守を支持するこの第一の法律を尊重するソゾメンの声明のネアンダーの言い換えです。それはこの法律の唯一の意図が宗教的なものであることを示しています。しかし、ソゾメン自身の言葉は、教授の英語で述べられているとおりです。ウォルフォード、この法律の宗教的性格を本当に強めています。ここを見てください：

「彼[コンスタンティヌス]はまた、ユダヤ人が週の最初の日と呼び、ギリシア人が太陽に捧げる主の日を同様に安息日の前日と同じように守ることを命じ、次のように命じた。当時は司法問題やその他の事柄は何も行われなかったが、神には祈りと嘆願が与えられるべきであった。」—「教会史」ソゾメン著、第 1 巻、第 VIII 章。

このことから、日曜日を特定のビジネスやその他の一般的な職業を中止する日とする最初の法律が世界に課した意図が、完全かつ専ら宗教的なものだったということに疑問の余地はありません。

日曜法の第 2 段階では、西暦 321 年に公布されたコンスタンティヌス法で、金曜日が削除され、日曜日が単独で定められました。対象範囲は裁判所などの官公庁だけでなく、「都市に居住する者」や「商業に従事する者」にも拡大された。

しかし、彼女の意図は間違いなく同じでした。立法に深く関係していた司教の一人であるエウセビオスは、彼女について次のように宣言しています。

「彼[コンスタンティヌス]はまた、ある日を宗教的礼拝のための特別な日とみなすべきであると命じました。」—コンスタンティヌスを讃える演説、なしIX。

西暦 386 年に法律の適用範囲が普遍化され、「日曜日のあらゆる種類の民事取引が厳しく禁止された」ときも、同じ厳格な宗教的性格が依然として法律に付加されていました。なぜなら、「罪を犯した者は、まさに冒瀆的であるのと同じくらい有罪であるとみなされるはずだった」からである。

- ネアンダー。

「冒瀆」は、いかなる範囲においても民事犯罪ではありませんが、あらゆる分野において、宗教的な犯罪にしか感じられなかった。

したがって、この法律自体に鑑みれば、その法律の中に、いかなる形であれ、宗教以外のいかなる意図も存在しなかったことは完全に明らかです。ただし、この証拠だけが残っているわけではありません。

それ自体で十分です。この法律を制定し、促進し、確保したまさにその個人によって、その法律の意図はもっぱら宗教的なものであり、具体的には宗教的なものであるという積極的な保証が与えられています。

繰り返しになりますが、エウセビオス司教は次のように私たちにこのことを保証してくださっています。これに関連してコンスタンティンに言うと：

「この広大な地球の大陸と島々に住む国々に、毎週主の日に集まり、それを祭りとして祝うように命じた人が他に誰がいるでしょうか。それは実際には体を楽しむためではなく、心の慰めとリフレッシュのためです。魂は神聖な真理の教えによるのです。」同上、第 XVII 章。

これらすべては、法に関連したコンスタンティヌス自身の行動によって確認されています。彼自身の法の解釈者として、彼が何を示しているかを示すその意味を意図して、彼は毎週日曜日の朝、与えられた合図に従って兵士たちに合唱させていた次の祈りを抜粋した。

「私たちはあなたを唯一の神と認めます。私たちはあなたを王としており、あなたの助けを懇願します。あなたのおかげで私たちは勝利を収めました。あなたを通して、私たちは敵よりも強力になります。私たちはこれまでの恩恵に感謝し、将来の祝福を信じています。私たちは共にあなたに祈り、私たちの安全を守り、私たちの皇帝コンスタンティヌスとその敬虔な息子たちを勝利に導いてくださるようあなたに祈ります。」— 『コンスタンティヌス帝の生涯』第 4 巻、第 20 章。

しかし、もし、当初の日曜法が専ら宗教的な性格を持っているということを何の考えもなく、ましてや何の意図もなしに、理性的な人の心の中に、そのような永続的な疑念さえも残るとしたら、彼らはこの日が示された用途のために確保されたのは、皇帝としてではなく法王としての彼の職と権限によるものであるという議論の余地のない事実によって、事実上削除されなければならない。聖日を指定するのは法王の唯一の特権だったからである。このことは、歴史家デュリュイの優れた権威である次の言葉が証明しています。

「どの日を聖なる日とみなすべきかを決定する際、また国家的に使用するための祈りを作成する際に、コンスタンティヌスは法王としての権利の 1 つを行使しましたが、彼がそうしたことは驚くべきことではありませんでした。」— ローマの歴史、第 CII 章、パート 11、パー。 4。

これは、その起源と専ら宗教的性格を理解するのに十分です。日曜法そのものが成立するときのこと。さて、次はどうでしょうか。

あなたのインスピレーションとイニシエーション

この当初の日曜法は、地球上に「神の王国」を確立するというコンスタンティヌスとの政治的・社会的取り決めと陰謀による、当時の民衆教会の大きな野望と計画の一部にすぎませんでした。そしてこれがまさに地上の神権政治の思想であり目的なのです。実際、教会の中に「偽りの神権的理論」が生じていたからです。それは容易に聖職国家の形成をもたらし、世俗権力を自らに従属させる可能性がある

誤った逸脱した方法で。」この神権的理論はコンスタンティヌス帝の時代にすでに広まっていた。そして「司教たちは自発的に彼に依存するようになった」

彼らの論争と、目標を推進するために国家権力を利用するという決意に対して。」 - ネアンダー。

この意味で、聖書にある本来の神の神権政治を模倣した人間の神権政治の計画全体は、間違いなく司教たちによって考案されたものである。そして日曜法を通じてそれは発効した。これは時間の歴史の中で完全に明白であり、否定することはできません。これは、当時のすべての教会文学を貫く明確な考え方です。そしてそれはエウセビオス司教の著作『コンスタンティヌスの生涯』に結晶化されています。教会とはファラオ・マクセンティウスに抑圧されたエジプトのイスラエルであり、コンスタンティヌスはこの抑圧されたイスラエルを解放した新しいモーセでした。ミルウィウス橋の戦いでコンスタンティヌスに敗れたマクセンティウスのティグリス川での溺死は、海でのファラオの打倒であり、彼は「石のように沈みました」。この新しいモーセによって新しい律法が与えられた後、新しいモーセは新しいイスラエルとともに砂漠で異教徒を征服するために出発しました。神権政治の完全な確立、約束の地への参入、そしていと高き聖徒たちが王国を掌握するまでである。この点で、新しいモーセによって幕屋が建てられ、聖書にある神のオリジナルを模倣した祭司職が確立されました。そして、依然として聖書にあるその神聖なオリジナルを模倣して、土曜日が真のオリジナルの神の神権政治のしるしであり、そして今もそうですが、日曜日は法律によってこの新しい偽りの神権政治のしるしとされました。そしてこれは、その中心人物の一人であるエウセビオス司教自身の言葉ではっきりと述べられているように、この明白な意図のもとに行われました。彼の言葉は次のとおりです。

「土曜日にやるべきことはすべて日曜日に移しました。」

このようにして確立された事物の計画と体制は、彼らの考えの中でまさに地上の神の王国であるということも、エウセビオス司教によって次のように明確かつ積極的に宣言されています。

「天の主権を身にまとった彼[コンスタンティヌス]は上を向いて、その神聖なオリジナルの型に倣って地上の政府を作り上げ、神の君主への適合に強さを感じている。」 「そしてカエサル任命によって、彼は預言者たちが何年も前に宣言したことに従って、預言者たちの予言を成就する。『そしていと高き者の聖徒たちが王国を占領するであろう。』」演説、第3章。

真の本来の神権政治のしるしとしての安息日の代わりに、またそれを模倣して、新しい偽りの神権政治のしるしとして帝国法によって確立され強制された日曜日の遵守は、すべての人々を「適任臣民」にする手段であった。この新しく偽りの「神の国」。エウセビオス司教が今でも語っている言葉は次のとおりです。

「私たちの皇帝は常に彼に愛されており、帝国の権威の源は上から得られます。」 「この宇宙の保存者は、父なる神の御心に従って、この天と地と日の栄えの王国を命じています。しかし、愛するわたしたちの皇帝は、地上で自分が統治する人々を独り子にして救いの言葉に導くことによって、彼らを王国の忠実な臣民とします。」キャップ。

II.

この証拠は、元の日曜法のインスピレーションと開始がもつぱら、そして特別に教会からのものであったことを証明しています。そしてこれらすべては、「偽りの非宗教的なものを自分自身に従属させる」という「司祭国家」の建設のための司教たちによる壮大で巧妙な計画を促進するためでした。

「逸脱したモード」を維持し、「目的を達成するために国家権力を利用するという決意」を効果的にするためである。

したがって、これら2つの側面の証拠によって、1. 「起源と性格」。二。
元の日曜法制の「インスピレーションとイニシエーション」 - 前記日曜法は特に宗教的かつ教会的であり、他のすべての思想と意図が特に排除されていることがわかり、これは証明され実証されています。なぜなら、それは事件で提起できるすべての証拠の全員一致の証言だからです。

今、何が起きているのでしょうか？

日曜法制定の起源の排他的かつ特に宗教的、教会的性格は、日曜法はその排他的、特に宗教的性格を失ったのだろうか？という疑問を提起する。

まず第一に、どうしてこのキャラクターが失われるのでしょうか？その性格は先天的かつ先天的なものです。これは彼がこれまでに持っていた絶対に唯一のキャラクターであり、このキャラクターが決して失われることはないことは完全に明らかです。何かが生き残ると同じくらい確実に、その本来の本質的な性質がそこにあります。したがって、この世界のどこに日曜法が存在するとしても、その教会的、宗教的性格は必然的にそれに結びついています。

これは事件の原理と性質そのものにおいて真実です。しかし、この問題を歴史的にたどり、その原則がどれほど完全に現れているかを見てみましょう。
当初の日曜法がその台頭の大きな要因となった「祭司国家」は、千年以上にわたり「世俗的なものに従属」してヨーロッパ全土を支配し、これは「神の権力を利用して」専制的に行われた。国家——すべての国家——その目的を達成するためである。」この信じられないほどの期間中、日曜法は、その本来の、生まれつきの、生来の教会的性格以外の何らの主張もなく続けられました。

1535年、ヘンリー8世はローマ教皇とイングランドとを離婚しました。しかし、それだけでした。というのは、その後「イングランド国教会」となったものによって、ヘンリーはすぐに教皇に代わって教皇として立ったからだ。法令により、国王は「地上におけるイングランド国教会の唯一の最高指導者として認められ、認められ、評判を得る」ことが命じられた。そして1553年、ヘンリーは正式に「地上における英国国教会の最高首長」の称号を引き継ぎました。

現在の英国国教会は、以前は英国のカトリック教会であったものにすぎません。」 「フォーム的には何も変わっていません。教会の外的な構成は変わっていませんでした。」 - 緑。

そして、この同じ変更されていないシステムの中で、教皇の日曜法が継続され、現在まで継続されています。それにもかかわらず、その本来の、土着の、生来の宗教的および教会的性格以上のものを示唆するふりはありません。

イギリスからアメリカの植民地に広がりました。これらの植民地はイギリスからの植民者によって設立されたものであり、したがってここ（著者は北米人でした）ではイギリス政府の延長にすぎませんでした。そして、イギリスの制度に厳密に従って、そしてその完全な範囲で、ロードアイランドを除くアメリカに設立されたすべての植民地は、一般的に「キリスト教の宗教」の形であれ、あるいはせいぜい「キリスト教の宗教」の形であれ、確立された宗教を持っていました。特定の教会の形で。

そして、アメリカのこれらの各宗教施設では、英国制度の日曜法が拡張され、一部ではさらに強化されましたが、これは元のローマおよび教皇制度の日曜法の延長にすぎませんでした。

しかし、ここでも、イギリスやローマでは以前と同じように、アメリカ植民地の日曜法には、本来の、土着の、固有の宗教的、教会的性格以外の考え、目的、見せかけはまったくありませんでした。

これらの植民地は現在イギリスの支配から解放され、「自由で独立した国家」となっています。しかし、依然として、確立された宗教と日曜法制のシステムにおいては、それぞれが以前と同じでした。しかし、バージニア州は直ちに英国国教会とその宗教をバージニア州に追放した。そして確立された宗教そのものに関しては、「信教の自由確立法」によってそれに関するすべてを排除した。しかし、現在のバージニア州の立法書には、イングランドの教会と州の制度と同一の日曜法が変更されておらず、古い土着の本来の宗教的および教会的なローマと教皇制度の変更されていない法律だけであった。キャラクター。

この点において、バージニア州の歴史は、ロードアイランド州を除く他の 13 の元々の州すべての歴史と実質的に同じです。そして、連合内のすべての州の日曜法は、元の 13 州以降、常に、それを所有していた元の 13 州の日曜法の拡張であり、事実上コピーでした。そして、この邪悪な進行の中で、ロードアイランドさえも倒錯し、腐敗してきました。そして常に、最後の州のこの日曜日の法律は、植民地におけるのと同じ、土着の、本来の宗教的、教会的性格のものでした。

グラテッラ エ デ ローマ。

したがって、コンスタンティヌス帝の最初の日曜法から米国の最新の日曜法に至るまで、それは常に同じであり、同じ目的であり、全く同じ性質のものである。

日曜日の法律 違憲

その後、宗教と国家を完全に分離し、「議会は宗教の確立に関する法律を制定してはならない、またその自由な行使を禁止するものではない」という憲法規定を備えたアメリカ合衆国中央政府が設立された。この国憲法の原則は、バージニア州の「信教の自由確立法」を先例としており、当初の 13 州以降のアメリカ連邦のすべての州の憲法制定の指針となってきました。そして憲法さえも、元の 13 州の法律ではありませんが、実質的にそれによって形作られてきました。そして、この指針は非常に忠実に従われており、この原則は米国連合全体で一般的に認識されているため、要約すると、事件は次のようになります。

「アメリカ憲法のいずれにおいても合法でないものは、次のように宣言することができます。

- 「1. 宗教の設立に関するあらゆる法律。
- 「2. 税金などを通じた宗教指導の強制的支援。

「3.カルト宗教への強制参加。

「4.良心の命令による宗教の自由な行使に対する制限。

「5.宗教的信念の表現に対する制限。

「これらの禁止事項は、何らかの形でアメリカ憲法に定められなければならない、良心と宗教的崇拝の自由を確保するものである。宗教問題に携わるいかなる人間も、国家や公的機関の検閲を受けるべきではありません。」

「立法者には、政教一致を実現したり、宗教的説得や礼拝様式を支持する優先順位を法律で定めたりする自由は与えられていない。どの宗派も国家によって特権を与えられ、法律によって利益を得ている完全な信教の自由はありません。

その他。

「階級や宗派に対して区別を確立するものは何であれ、その区別が不利に作用する限り、迫害となります。宗教に基づく場合は宗教的迫害。差別の程度は最初は重要ではありません。権利や特権の不平等を生み出すだけで十分なのです。」

憲法上の制限、クーリー、キャップ。 XIII、パー。 1-9.

さて、これらの事実、条項、原則を理由に、日曜法を疑いもなく、排他的かつ特別に宗教的なものとして受け入れると、米国のどこであれ、すべての憲法の下で日曜法が正当なものであることはあらゆる原則から完全に明らかです。「宗教的迫害」であり、それ自体全く憲法違反で無効である。

それが違憲であることは州裁判所と連邦裁判所の両方で認められている。オハイオ州最高裁判所は、憲法の下で「宗教が日曜法の唯一の根拠であるならば、それは一瞬たりとも耐えられない」と明確に述べた。そして米国地方裁判所は、「日曜法の存続を正当化しようとする日曜弁護士たちのやや憂鬱な光景」を指摘した。。。。そうではないとの議論とともに

「信教の自由という市民の教義に抵触していることは確かだが」、「それが宗教を助けるものとして存在するという事実の可能性は否定できない」と宣言している。正直に告白しても否定することはできません。」そして最後の法廷は、それをあらゆる言葉で明確に「迫害」と認定した。

司法上の発明と制裁

それにも関わらず、米国全土で日曜法は裁判所によって合憲として支持されています。どうしてそうなるのでしょうか？答えは、これは司法上の発明と認可によってのみ行われるということです。

注: それは司法による憲法の解釈や解釈によるものではなく、完全に法律の性質に関する司法の発明と認可によるものです。これは、司法の発明と認可によって、日曜法に全く新しく奇妙な性格が与えられることを意味する。そして、この新しく奇妙な根拠に基づいて、この法律は合憲として維持されます。もしこの新しく奇妙な地形が実際に元来の在来の地形だったとしても、そのような法律の合憲性には疑問の余地があるだろう。でも入ってない

いかなる感覚も、奇妙な新しい真の地である。それは純粋な発明であり、原則としても事実としても間違っています。

この日曜法の新たな奇妙な根拠の司法上の発明と認可は、それが身体的利益、健康増進、人々の失われたエネルギーの回復に適用されるという命題である。この法律は「労働者保護」を目的としており、したがって「政治的規制として」かつ「純粋に民事上の規則として」合憲である。

さて、日曜日法のイロハを知っている人なら誰でも、そのような意図、そのような目的、またはそのような根拠に基づいて日曜日法が制定されたことは世界中にないことをよく知っています。しかし、世界中のすべての日曜法は、単にその宗教的および教会的性格を理由に課せられ、あらゆる物理的および市民的要素が明確に排除されている。

アイダホ州がその好例です。後者は厳密に関連しています。その精神とまさにその目標を掲げて、コンスタンティノスの時代の司教たちは、アイダホ州出身ではない教会階級であったが、アイダホ州の日曜法を制定し、アイダホ州議会に提出し、なんとか可決させた。アイダホ法の形式。そして、憲法の下で「宗教的信仰と崇拝の実践と享受は永久に保証される。そして、何人も、宗教的見解を理由に、いかなる市民的または政治的権利、特権、または能力も否定されないものとしませう。 。 。また、いかなる宗教宗派や礼拝形態も、法律によりいかなる優先も与えられない」として、アイダホ州最高裁判所は、この宗教および教会法は「合憲」であると判示した。

ワシントン州も別の例です。州憲法は、「宗教的感情、信仰、崇拝に関するあらゆる問題における絶対的な良心の自由はすべての個人に保証され、何人も宗教を理由に身体や財産に不便を与えられたり、妨害されたりしてはならない」と宣言している。

1889年にこの憲法規定が制定されたとき、日曜法を法律から他のあらゆる形態の宗教と同様に除外すべきであるということが制定者たちの一致した意図であった。この本の著者は、この規定が策定されたとき、憲法制定委員会に出席していた。私は個人的に、そのようなことがその制定者らの意図であることを知っています。なぜなら、日曜法のまさにこの主題が委員会によって特に検討されたからです。

委員会は全会一致で、策定されたこの憲法規定は意図通り日曜法を除外するものであるとの判断を下した。しかし、その憲法の下で、ワシントン州最高裁判所は日曜法を「合憲」として支持した。

このように、実際には宗教的および教会的以外の意図を持たずに聖職者によって日曜法が制定され、それを禁止するという明白な意図を持って偽造された憲法規定により、裁判所は全くの司法上の発明と認可によってそれを「合憲」としたのである。

しかし、この種のあらゆる決定は、明らかに第一原則の一つと、司法行為の「普遍的に認められた規則」、つまり「立法者の意図は法律である」、「法律は法律である」という原則と規則を明らかに無視している。「法律は立法者の意図に従って作られなければならない」、そして「法律はそれを作った人の意図以外には何の意味も持たないかもしれない」。

この原則は常に正義において、社会の構築を導くものでなければならないということ
法令および憲法は、次のように権威をもって宣言されています。

「国民感情の変化を認めなければならない裁判所は、影響を与えるだろう。
成文憲法にその制定者の意図に裏付けられていない解釈を与えることは、公式の宣誓と公の義務を無視したと
いう当然の罪となる。」—コーリー著、憲法の限界、 p. 67.

この原則は、法令の制定と憲法の制定に等しく適用されます。そして、法廷がこのように許容すべき感情
の変化が法廷に影響を与えるか否かに関わらず、それが公的で一般的なものであろうと、あるいは法廷自体の私
的、個人的な感情や偏見のみであらうと、原則は同じであり、そのような法廷は等しく「有罪」である。公式宣誓と
公務に対する過失による軽視。」しかし、これはまさに裁判所が全く新しい奇妙な意味を確立することによって、
人類の歴史や経験のどこにもない、その創設者や制定者の意図によっていかなる意味でも裏付けられていない
構造を日曜法に与えていることと同じである。

盗聴可能なごまかし

しかし、日曜法のための新しく奇妙な根拠のこの発明と認可でさえ、そこから土着の本来の宗教的根拠
を排除することは許されない。実際、この発明は、宗教としての日曜法を導入し、それを絶対に禁止する憲法規定
の下で「合憲」であるかのように見せる口実にすぎない。なぜなら、それがそれぞれの場合において「純粋に民
事上の規則」とされるとすぐに、「立法が宗教に基づいているという事実」であり、「キリスト教の特殊な側面」
であるという宣言によって、即座に宗教的地位が与えられるからである。反対ではあるが、むしろ強く支持してい
る。」したがって、宗教立法、純粋な立法操作を禁止する憲法の下では、完全に宗教的かつ教會的な「合憲」立
法を制定する措置が取られる。

依然として違憲

しかし、これらすべてに対して、日曜日の立法は宗教的性格のため、米国のどこでも憲法違反であるとい
う不変の真実が依然として残っています。それを合憲とするために「民事的根拠」を発明しても、その本来の生
来の宗教的、教會的性格により、依然として違憲のままであるだけである。言い換えれば、憲法が、義務付けられ
た法律によって、あらゆる宗教上の遵守、制限、条項からの絶対的な自由を保証している場合、いかなる宗教的性
質も法律に付随することは、その理由により憲法違反となるのである。

憲法は政府における国民の意思を最高に表現するものです。そして、この至高の意志がす
べての宗教的な事柄を法律から除外するとき、この至高の意志は、宗教的なものに「民事的根拠」
を発明するという単なるトリックによって回避することはできません。このような策略によって、こ
れまでに聞かれたあらゆる宗教的な事柄が合憲となり、すべての人に押し付けられる可能性がある
。そして憲法で保障されている信教の自由は、こうして達成不可能な夢に変わってしまうだろう。

したがって、「日曜日の遵守という宗教的根拠は、民事規則としての日曜日の法律に反対するものではなく、むしろ賛成するものである」のではなく、真実は、これが日曜日の法律に対する可能な限り最も強力な反対であるということです。実際、それは、その「民事的」性質や必要性が何であれ、それを無効にするだけである。

カリフォルニア州最高裁判所は、この原則を次のように明確に述べています。

「憲法は、『この州では、差別や選好なく、宗教的職業と崇拝の自由な行使と享受が永久に許可される』と宣言している。」。。。

憲法問題は立法権に関する裸の問題である。立法府には特定のことを達成する権限があったのか？特別なことは何でしたか？—それは日曜日の労働の禁止でした。この法律は、単に地方自治体の条例として、これに投票した人々の意図を示すような形で策定された。しかし、もし実際に、それがすべての人に信教の自由を保証する憲法の条項に矛盾するのであれば、我々はその理由に基づいてそれを違憲と宣言せざるをえなかったはずである。」—ニューマン教授。

その原理は、信教の自由の侵害によって国家、社会、各個人に対して必ず行われなければならないのと同様に、望ましい国民的利益の剥奪を国家、社会、個人にこれほどの損害を与えることは不可能であるということである。良心の権利の侵害、宗教家への市民権力の付与。

たとえ合憲だったとしてもそれは間違いだろう

したがって、日曜法と教会法が、それ自体として、そしてどのような控訴のもとでも、合衆国全土で違憲であり「迫害」であることは否定できない。しかし、たとえ英国、フランス、スペイン、ロシアと同様に、ここでも合憲だったとしても、それは依然として間違っているでしょう。宗教的かつ教會的なものであるため、日曜法はそれ自体が間違っており、決して正しいとは考えられません。

ネブカドネザル王は、3人の若いヘブライ人に反抗して、宗教的根拠と性格を備えた法律を制定しました。しかし神は彼とすべての王と民に、それは間違っていると永遠に教えました。

メディア・ペルシャ政府はダニエルに対抗して、宗教的根拠と性格を持った柔軟性のない法律を制定した。しかし神は、政府、すべての政府、国民に、それは間違っていると永遠に教えられました。

そして、教会が「目的を達成するために国家の力を利用している」ことについては、これはおそらく宗教的以外の意図があるとは考えられないが、この巧妙なトリックによって教会は十字架につけられるという「目的」を達成するだろう。栄光の主よ、これは、そのような組み合わせと手順がこの上なく悪魔的に間違っていることを、広い宇宙に対して、そして永遠に示すのに十分な証拠です。

したがって、地球上の他のどの法律よりも高次の法律と強力な権威が存在します。これは神の意志であり、権威です。宗教は知性体が創造主に対して負う義務であり、その義務を果たすための方法です。したがって、あらゆる魂の宗教は、彼と魂の主権者との間にのみ存在します。したがって、日曜法は地球上のすべての州や政府で合憲であっても、宗教としては完全に間違っています。それは領土の侵略であり、神の権威と管轄権の篡奪だからです。

彼に土地はない

法律または政府に関する限り、世界中の誰もが何らかの義務を負う当局は2つだけです。この二人はGODとシーザーです。この意味で、主イエスはこの真理を次のように宣言されました。「したがって、カエサルのもものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」

日曜日の法律と日曜日の遵守は、次のようなことから生まれたものではありません。神でもシーザーでも。

それは神からのものではありません。なぜなら、証拠が明らかにしているように、それは最初から、神の代わりに罪を犯した人間が偽りの人為的に行った神権政治のしるしとして確立され、主の安息日にとって代わるのが神であることを示していたからである。神自身が唯一の神である真の神聖政治のしるし。

それはシーザーのものではありません。というのは、証拠が示すように、コンスタンティヌスが日曜日を聖なる日として定め、その遵守を確立したのは、国家元首であるカエサルとしてではなく、宗教の長であるポンティフェクス・マクシムスとしてのみであったからである。そしてこれは、神でもカエサルでもない「教会」の靈感と要求によるものです。

したがって、それは神からでもカエサルからでもなく、異教の「宗教の指導者」を介した「教会」からのみ発せられるので、宇宙の誰にもそれを遵守する義務も根拠も余地もありません。どのような形であれ、何でも。

あなたの最終的な目的

したがって、あらゆる実証可能な側面において、日曜日の法律の生得的、独創的、固有の性格は常に同じであり、排他的かつ具体的に宗教的および教會的です。

そして日曜法の最終的な目的も同様にいつも同じです。私たちは、当初の日曜法における究極の目的が「偽りの逸脱した方法で世俗を自らに従属させる聖職者国家の形成」であったことを見てきました。そして「目的を達成するために国家権力を利用する」という聖職者の「決意」を有効なものにする。

そしてそれこそが、今の彼の究極の目的なのです。議会と議会は常に縮小されています。議員たちは執拗に当時の帝国政府が常に日曜法制、そしてさらに日曜法制を支持していたように、現在も聖職者から接近され、脅迫さえされている。たとえそのような法律がどれほどすでに立法帳に載っているとしても、さらに多くの法律が存在することを求める根強い要求が依然として残っています。そして、それはすべて、実際に定式化されていないとしても、関心のある聖職者自身によって、そして最初は他の聖職者によって行われたのとまったく同じように、ますます異端審問に近づく用語で指示されます。

これ以上進む必要はありません。ここに提示された証拠は、日曜法の性格が常に専ら、排他的、具体的に宗教的および教會的なものであることを決定的に示している。したがって、これは米国においては憲法違反であり、非米国的である。そしてそれはどこにでも反神であり、反キリスト教です。

宗教における個性は、すべての人間の侵すことのできない権利です。しかし、ルシファーの崩壊以来、神の代わりに他の人間を支配するという人間の執拗な決意が常に存在していました。

残酷さと抑圧を伴った暗いのは、教会指導者の命令に従って他人に神の崇拝を強制しようとする人間の努力の記録であり、彼らは神の意志を実行していると思っていたが、実際には悪魔に仕えていたのである。これらの有力者たちが並外れた力を自由に使えるにもかかわらず、真のクリスチャンは、個人的な犠牲を払ってでも、神の原則を放棄することを拒否してきました。どの世代にも、神の大義を支持し、そうすることで最終的な勝利の基礎を築いた人たちがいました。

宗教における個性は今日、本来あるべきように理解も評価もされていません。なぜなら、現代世代はこれらの貴重な自由を確立するために必要な闘争について何も知らないからです。この無知と無関心は、サタンに過去の抑圧的な支配を陰湿に再び課するのに必要な利点を与えます。したがって、現代の世代は、火事、ライオン、刑務所、その他あらゆる迫害の前で宗教における個性が試されたときに得られた勝利を知り、そのような痛ましい代償を払って勝ち取った自由のありがたみを学ぶ必要がある。なぜなら、過去に行われた圧力が再び課される時がすぐに来るからです。